

北陸自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

みやの  
宮野遺跡

1985

新潟県教育委員会

北陸自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

宮野遺跡

1985

新潟県教育委員会

## 序

昭和47年以来、県教育委員会は、北陸自動車道の建設に伴い、埋蔵文化財の発掘調査について日本道路公団と協議を進めながら実施してきた。北陸自動車道は昭和53年に新潟・長岡間が、長岡・西山間が昭和55年に、西山・柏崎間が昭和56年に、昭和58年に柏崎・上越間が開通し、今や新潟県は高速時代を迎えている。

委託を受けて実施した、上越市三ツ橋新田地内に所在した宮野遺跡の発掘調査記録である。

この調査により、沖積地における平安時代の人々の生活や文化の一端が明らかになった。本県においては、沖積地における考古学的研究は、まだ日が浅く、その端緒についたばかりである。本調査の成果が今後の関連分野の研究を進めるうえに一つの方向づけが得られたとすれば、意義深いものである。本書が広く研究の一助となればと願うものである。

なお、本調査に多大なる御協力・御援助を賜わった地元上越市及び上越市教育委員会並びに市民の方々、また、計画から発掘調査実施に至るまで、格別の御配慮を賜わった日本道路公団に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和 60 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 久間健二

## 例　　言

1. 本報告書は新潟県上越市三ツ橋新田字宮野に所在していた宮野遺跡の発掘調査の記録である。発掘調査は北陸自動車道の建設に伴い、新潟県が昭和56年度に日本道路公团新潟建設局から委託を受けて実施したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となって、昭和56年6月29日から9月30日までと昭和56年10月12日から10月24日まで実施したものである。
3. 遺物の整理・復元作業は県教育庁文化行政課埋蔵文化財係の職員があたった。
4. 発掘調査に伴う出土遺物の注記は小字名の「宮野」からMNとし、グリッド名・層位を併記した。
5. 発掘調査による出土遺物は一括して県教育委員会が保管・管理している。
6. 遺構・遺物の実測・写真撮影及び挿図などの作成は戸根与八郎・田辺早苗・佐藤雅一があたった。
7. 本報告書の執筆は発掘担当者を中心にして分担執筆したものである。
8. 発掘調査にあたり、参加者ならびに上越市の温かい御支援と御協力を賜わった。また、日本道路公团新潟建設局上越工事事務所から種々の御配慮を賜わったことを記して感謝の意を表する次第である。
9. 本遺跡の発掘調査は下記の体制で実施した。

調査主体	新潟県教育委員会	(教育長 久間健二)
総 括	南 義昌	(新潟県教育庁文化行政課長)
管 理	石山 欣弥	(新潟県教育庁文化行政課長補佐)
調査指導	金子 拓男	(新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長)
調査担当	戸根与八郎	(新潟県教育庁文化行政課学芸員)
調査員	藤巻 正信	(新潟県教育庁文化行政課学芸員)
	品田 高志	(新潟県教育庁文化行政課嘱託)
	田辺 早苗	(新潟県教育庁文化行政課臨時任用職員)
	佐藤 雅一	(新潟県教育庁文化行政課嘱託)
協 力	上越市教育委員会社会教育課	
事 務 局	近藤 信夫	(新潟県教育庁文化行政課副参事)
	獅子山 隆	(新潟県教育庁文化行政課主事)
	伊藤 和子	(新潟県教育庁文化行政課主事)

## 目 次

I	序 説 .....	1
1.	調査に至る経緯 .....	1
II	遺跡の環境 .....	5
1.	周辺の地理的環境と遺跡の立地 .....	5
2.	歴史的環境 .....	7
III	発掘調査 .....	10
1.	調査の方法とグリッドの設定 .....	10
2.	土層と遺構・遺物 .....	11
IV	遺構・遺物 .....	12
1.	建物跡 .....	12
2.	溝 .....	15
3.	土 壤 .....	21
4.	ピット .....	25
V	遺構外出土の遺物 .....	31
1.	須恵器 .....	31
2.	灰釉陶器 .....	35
3.	土師器 .....	35
4.	中世陶磁器 .....	38
VI	総 括 .....	39
1.	沖積地における遺跡について .....	39
2.	遺物について .....	42
3.	結 語 .....	44

## 図版目次

- 図版第1図 遺跡遠景（南西から）、遺跡遠景（北東から）
- 図版第2図 18～20B・C・D（北東から）、14～17B・C・D（西から）
- 図版第3図 13～18E・F・G（南西から）、13～18E・F・G（北東から）
- 図版第4図 17～19E・F・G（南東から）、17～19E・F・G（東から）
- 図版第5図 18・19G（北から）、12～19G（北東から）
- 図版第6図 18・19G（南から）、21～25B（北東から）
- 図版第7図 1号建物跡（北西から）、2号建物跡、3号建物跡（西から）
- 図版第8図 A溝（北から）、A溝断面、B溝（東から）、C溝（西から）、C溝断面
- 図版第9図 D溝（北から）、D溝断面、E溝（東から）、E溝断面
- 図版第10図 F溝（南東から）、F溝断面、G溝（東から）、G溝（西から）
- 図版第11図 H溝（北東から）、H溝断面
- 図版第12図 1号土壤（北から）、1号土壤遺物出土状況
- 図版第13図 16BP<sub>13</sub>（東から）、17BP<sub>4</sub>（南から）、16FP<sub>4</sub>（南から）、2号土壤、20BP<sub>23</sub>、16BP<sub>1</sub>
- 図版第14図 8GP<sub>1</sub>・8GP<sub>2</sub>（東から）、16FP<sub>1</sub>（西から）、16FP<sub>1</sub>断面
- 図版第15図 C溝土器出土状況、5号土壤土器出土状況、17Bピット5刀子出土状況、土器出土状況
- 図版第16図 遺構内外出土遺物（須恵器・土師器・灰釉陶器他）
- 図版第17図 溝出土遺物（須恵器・土師器・中世陶器）
- 図版第18図 溝出土遺物（須恵器・土師器・中世陶器）
- 図版第19図 ピット出土遺物（須恵器・土師器）
- 図版第20図 ピット出土遺物（須恵器・土師器他）
- 図版第21図 ピット出土遺物（近世陶磁器）
- 図版第22図 建物跡・ピット出土遺物（須恵器・土師器・石鏃・刀子他）
- 図版第23図 遺構外出土遺物（須恵器）
- 図版第24図 遺構外出土遺物（須恵器・土師器・中世陶器）

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の地形	5
第2図	周辺の遺跡分布	6
第3図	字宮野更正図(部分)	7
第4図	グリッド設定図	10
第5図	遺構全測図	折り込み
第6図	遺物の分布密度	折り込み
第7図	土壙柱状図	11
第8図	1号建物跡	12
第9図	2号建物跡(上)・3号建物跡(下)	13
第10図	2号建物跡出土遺物	14
第11図	溝(A~G・I溝)	折り込み
第12図	溝出土遺物(A~D溝)	17
第13図	溝出土遺物(D~F・H・I溝)	19
第14図	溝(H溝)	20
第15図	土壤(1・2・5号土壤)	21
第16図	土壤出土遺物	23
第17図	2号土壤出土遺物	24
第18図	ビット(16BP <sub>1a</sub> ・17HP <sub>1</sub> )	25
第19図	ビット出土遺物	26
第20図	ビット出土遺物	28
第21図	ビット出土遺物	28
第21図	ビット出土遺物	29
第22図	遺構外出土遺物(須恵器1)	32
第23図	遺構外出土遺物(須恵器2)	33
第24図	遺構外出土遺物(須恵器3)	34
第25図	遺構外出土遺物(灰釉陶器)	35
第26図	遺構外出土遺物(土師器・中後陶器)	36
第27図	遺構外出土遺物(近世陶磁器)	38
第28図	遺跡模式図	44

# I 序 説

## 1. 調査に至る経緯

北陸自動車道は新潟市から長岡市を経て、日本海に沿って富山・石川・福井の各県を通過し、滋賀県の米原町に至る総延長478kmの道路で、日本海沿岸地域の交通の円滑化と関係地域の開発を図ろうというもので、日本海側の幹線道路としてその役割は極めて大きい。昭和53年には長岡インターチェンジまで、昭和56年には柏崎インターチェンジまで開通し、その経済的交流と時間的短縮に大きく寄与している。県教育委員会は昭和45年8月に新潟～長岡間の埋蔵文化財包蔵地の調査を、翌昭和46年には長岡～上越間の埋蔵文化財包蔵地の調査を地元研究者に依頼して実施した。長岡～上越間の埋蔵文化財包蔵地の調査では総計54遺跡が確認され、この結果にもとづいて県教育委員会は日本道路公団と法線協議を行った。昭和47年には長岡～上越間の法線発表が行なわれ、日本道路公団東京建設局長岡工事事務所長から幅2kmで自動車道通過予定地の遺跡分布調査依頼が県教育委員会にあった。県教育委員会は再度遺跡分布調査を実施し、昭和47年10月に日本道路公団東京建設局長岡工事事務所長あてに、柏崎～上越間の分布調査結果を文書で回答した。2回にわたる分布調査にもかかわらず、今回発掘調査を実施した宮野遺跡はまだ発見されていなかった。昭和54年になると北陸自動車道の工事も着々と進み、県教育委員会も木崎城跡（中頭郡柏崎町）・鷹ヶ池遺跡（中頭郡大潟町）の発掘調査を工事着手前に実施してきた。中頭郡大潟町～上越間についても順調に工事が発注され、工事の進捗状況は目を見張るものがあった。

昭和55年度に上越市教育委員会は遺跡の周知の基礎資料を得るために市内の遺跡詳細分布調査を実施した。この調査によって、本遺跡の一部が道路敷にかかることが判明し、昭和56年1月26日付け上教社第98-2号で遺跡発見通知が文化庁長官に提出された。通知によるとその時代及び種別は平安時代の遺物包蔵地で、面積は31,525m<sup>2</sup>、法線内面積は9,500m<sup>2</sup>である。県教育委員会は遺跡発見通知を文化庁長官に進呈するとともに昭和56年2月2日付け教文第55号で日本道路公団新潟建設局長あてに新遺跡の発見通知の写を送付し、遺跡の取扱いについては別途協議するよう指導した。56年3月2日付け新建総第14号で日本道路公団新潟建設局から県教育委員会に宮野遺跡の発掘調査依頼があった。すでに日本道路公団新潟建設局と県教育委員会は56年度事業と発掘調査の調整・協議を行なってきたが、更に1つ追加という点については県教育委員会としては全く予期せぬ出来事であった。工事もすでに発注済みで、上越インターチェンジまでは上新バイパスとの関係もあり、今年度中に発掘調査が完了しなければ工期的に無理が生じるという問題が日本道路公団新潟建設局側にあった。その後たび重なる協議を行なった結果、6月上旬になって最終的協議が成立し、県教育委員会は6月下旬から発掘調査に

着手することになった。6月17日付け教文第421号で県教育委員会は文化庁長官に文化財保護法第98条の2の規定にもとづいて埋蔵文化財包蔵地の発掘通知を提出した。

6月17日、上越市教育委員会社会教育課長に発掘調査の方法・期間などの概要を説明し、協力を求めた。そして福田・三ツ橋・原坪・東小猿屋・三田・三田新田の町内会長に作業員雇用要項にもとづいて作業員の確保を依頼する。18日に日本道路公団と現地打合せを行った。現状は法線内に3~5mの工事用砂が積み込まれ、表面は飛砂防止のためビッチが薄く張りかためられたりして、とても発掘調査を実施できるような状況ではなかった。県教育委員会は日本道路公団に対して、工事用砂の除去・旧宅地内の土台や立木の除去を発掘着手までに実施することを申込む。これに対し日本道路公団は工事用砂の除去については全部は除去できないので、地区割をして除去したいという。地区割と発掘優先地区が合致するよう両者で調整を行なった。砂の積み込みの少ない地点を選んで、センターに沿って長さ45m、幅12mのトレーナーをバックホーで掘り下げる。層序は第1層黒褐色土、第2層黄褐色砂質粘土、第3層青灰色粘土で、第1層は30~40cm、第2層は100~150cmの厚さがあり、遺物は第1層中より出土し、遺物包含層そのものは存在していないと判断された。遺構は断面で確認されたもののその時期は不明であったため面的調査が必要であると思われた。6月25日、最終的確認を日本道路公団と行ったものの、砂の除去は長期の降雨により予想外に進んでいなかった。

## 2. 発掘調査の経過

本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会が発掘調査主体となり、県教育庁文化行政課の職員を中心に、地元考古学研究者を調査員に依頼して協力を得た。また、地元の有志の方々には作業員として多大なる協力を得た。当初、本遺跡の発掘調査は昭和56年6月29日から11月28日までの153日間の予定であったが、工事用道路のつけ替え等工事とのかかわりから一時中断せざるを得なかった。発掘調査は6月29日~9月30日までと10月12日から10月24日までの2期に分けて実施した。特に後半の調査はプレロードの下にも遺物が散布していると考えられ、昭和56年9月8日付けで県教育委員会が日本道路公団に対して提出した範囲変更協議にもとづいて実施したものである。最終的発掘総面積は8,389m<sup>2</sup>である。

### 調査日誌抄

6月29日は発掘用具の搬入を現地プレハブ事務所へ行う。日本道路公団新潟建設局上越工事事務所・上越市教育委員会に調査開始の挨拶を行うとともに、遺跡の現状写真撮影を行う。

6月30日は法線内の砂の除去がほとんど進んでいなかったために、日本道路公団新潟建設局上越工事事務所と協議し、砂の除去計画を全面的に変更する。また、排水溝をバックホーで掘り下げたり、18-20-B~Dに幅3mのトレーナーを3本南北方向に設定する。

7月1日には調査の諸準備が整ったので、調査員・従業員がプレハブ事務所に集合し、調査の方法や事務的事項について作業員に説明を行なったのち実質的発掘調査に着手した。昨日設定したトレンチでは地表面下約40cmで地山の黄褐色砂質粘土層に達する。表土(灰黒色土)が20cm弱、その下に黒褐色土の遺物包含層が10~15cmの厚さで存在している。19B・18Cでは南北に走る溝(A溝)が検出された。包含層の上面からは中世陶質土器が、遺物包含層からは土師器・須恵器が出土しているが、量的には多くはない。7月6日までの間に13~17-B~Dにもほぼ東西のトレンチを幅3mで設定し掘り下げる。13~17-B~Dでも基本的層序には変化はないものの、地山が西側にゆるく傾斜している。各トレンチでは性格不明のピットが数多く検出された。Bラインでは遺物包含層が残っているが、C・Dラインでは地山面までは浅く、遺物包含層は残っていないかった。遺物は散発的に出土する程度である。調査員は今までの調査データーを検討した結果、遺構が検出される可能性があるのではないかという結論に達し、今までトレンチを入れた範囲については表土をバックホーで除去することにした。

7月9日には表土の除去が終了したので、各グリッドの遺構精査を開始する。13~17-B~Dでは旧宅地のため、所属時期の不明なピットが数多く発見された。また、6~8-C~Gについてもトレンチを設定して試掘確認を行った。中世陶質土器や土師器片・須恵器片が散発的に出土する程度で、ピット等はあまり検出されなかった。13~17-B~Dでのピット等の分布は北西部及び北部に多く、C・Dラインに行くに従って遺構の数は少くなり、かつ散発的になってくる。16Bでは2間×2間の建物跡が、B19・C18で確認された溝はさらに17D・17Eに連続していることが判明する。また、18~20-B~Dにおいても東西に走る溝(B溝・C溝)が確認された。20BP<sub>16</sub>(2号建物跡)から石製の誘導が一点出土した。

7月13日には遺構の上面確認が終わったので、ピットや溝の性格を追求するために、ピットは半截し断面を観察することにした。数多くのピットと晴天による土の乾燥化のために調査は思うように進まなかった。16Bで検出された建物跡では柱穴内に柱痕が残存していた。反面、旧宅地のために新しいピットもかなりあり、地山面までかなり改変されていることが判明した。この作業を7月25日まで継続した。7月27日から8月15日までは県教育委員会が調査主体となって実施する中頭城郡城郷遺跡詳細分布調査(7月31日から8月8日)や旧盆のため、発掘調査を一時中断する。

8月18日作業を再開する。18~20-B~D、13~17-B~Dの遺構の精査及び掘り下げを継続する。溝・ピットがさらに検出され、ピットには石の詰まったもの、灰色粘土が詰まったもの等があり、16Bピット16、17Bピット17では石が詰まり、土師器・須恵器が出土する。一方12~18-E~Gについては遺構・遺物の広がりを追求するために幅2m、長さ4mの小試掘溝を14ヶ所に設定して掘り下げる。20日には小試掘溝は全て完了したので更に4ヶ所の小試掘溝を設定し、補足調査を実施した。地表面下20~30cmで地山の黄褐色砂質粘土に達し、遺物包含

層は部分的に残っているものの大半は畑地の耕作により攪乱されている。地山面は東南方向に順次低くなっている。遺物は表土に須恵器・土師器と中世陶質土器が混在して出土している。また、11・12ラインでは地表面下にゴミの堆積があり、そして青灰色粘土となり遺物は全く出土しなかった。このような状況から本地区については遺構が残存している可能性が多分にあるため、11・12ラインを除いて表土をユンボで除去することにした。21日には13~17-B~Dの平面実測を開始し25日に完了する。26日には18~20-B~Dの遺構調査が完了したので写真撮影を行ない、ただちに平面実測に着手する。

8月27日から13~18-E~Gについて遺構の検出に努める。D溝~G溝の計4本の溝が検出された他、大小のピットが検出された。ピットにはビニール等がは入った新しいピットが多く、古いピットは相対的に減少してゆく傾向にある。遺物も少くなり、そろそろ遺跡の範囲の限界に近いものと思われた。9月7日には遺構の大半が掘り上り、平面実測を開始する。

9月1日からは17Bから19Eに通ずる生活道路敷を調査するために、ユンボを使用して土砂の除去を行う。4日から生活道路敷を調査する。D溝が連続することとピットが1個確認されたにすぎず、7日には完了した。D溝からは須恵器・土師器と中世陶質土器が混在して出土している。この溝は法線に隣接してある高橋家の屋敷周囲にめじっている溝に接続している。

9月7日には工事用迂回路を含めた7~9-D~Gの表土をバックホーで除去する。工事用迂回路のある9~10-D~Gでは黄褐色の砂質粘土ではなく、ゴミの堆積層となり、その下が青灰色粘土層になっている。一方、7ラインでは赤褐色の砂質土が急に西側へ傾斜している。

9月11日には13~18-E~Gの平面実測を残して全て完了する。本日から7~9-D~Gの調査を始める。19日には精査が一応終了したが、中央部は攪乱され、南北両端に地山が残存しているのみである。遺構はH溝が1本とピットが2個検出されたにすぎなかった。遺物は破片が散発的に出土するのみで、まとまったものはない。26日には当初予定していた調査は一部を残して完全に終了した。

9月28日から30日までは調査員が今までの図面整理や補足調査を実施した。

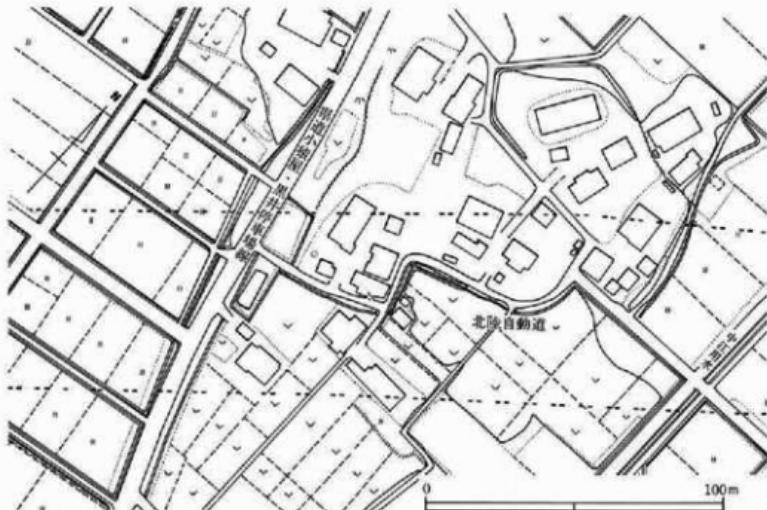
工事用道路を完全に使用不能にすることは工事にさしつかえるということで、13~18-G22~25-Bについては10月12日から24日までの間実施した。13~18-Gでは今まで検出されていた溝の延長と小ピットが確認された。遺物も全体的に極めて少なくなり細片になっているものが多くなった。22~25-Bでは地山面が北東へゆるく傾斜し遺物包含層というものは全くなくなり、わずかにピットが2個確認されたにすぎなかった。遺跡の中心部から確実にははずれたものと思われた。24日には実測等の作業や図面点検が終わり、器材・資料等の撤収を行い、現場における作業はどこおりなく完了した。

## II 遺跡の環境

### 1. 周辺の地理的環境と遺跡の立地

高田平野は新潟県の南西部に位置し、柿崎町・上越市・新井市を頂点としたほぼ三角形を呈している。平野周辺を概観すると、東側には東頸城丘陵があり、その背後には斑尾山(1,381m)を最高峰とした標高1,000m前後の関田山脈がある。西側には西頸城丘陵が発達し、背後には火打山(2,462m)を最高峰とし、南葉山(949m)へ向って南北に走る西頸城山地がある。南側には富士火山帯の北端をなす妙高・黒姫・飯綱の各火山が連なっている。広大な妙高山の裾野では軽石流堆積物・泥流堆積物による扇状地およびローム層の堆積した台地が存在している。西側の日本海沿いには延長約20kmにわたる潟町砂丘が日本海に平行して発達し、その幅は最低500m、最高2,500mを測り、最も高い所は潟町付近で標高約40mを測る。砂丘と丘陵の間には標高5~6mの沖積地が発達し、砂丘後背地には大潟(江戸時代末期に干拓され消滅)をはじめとする中小の湖沼群が並んでいる。平野の大部分は沖積平野によってしめられている。

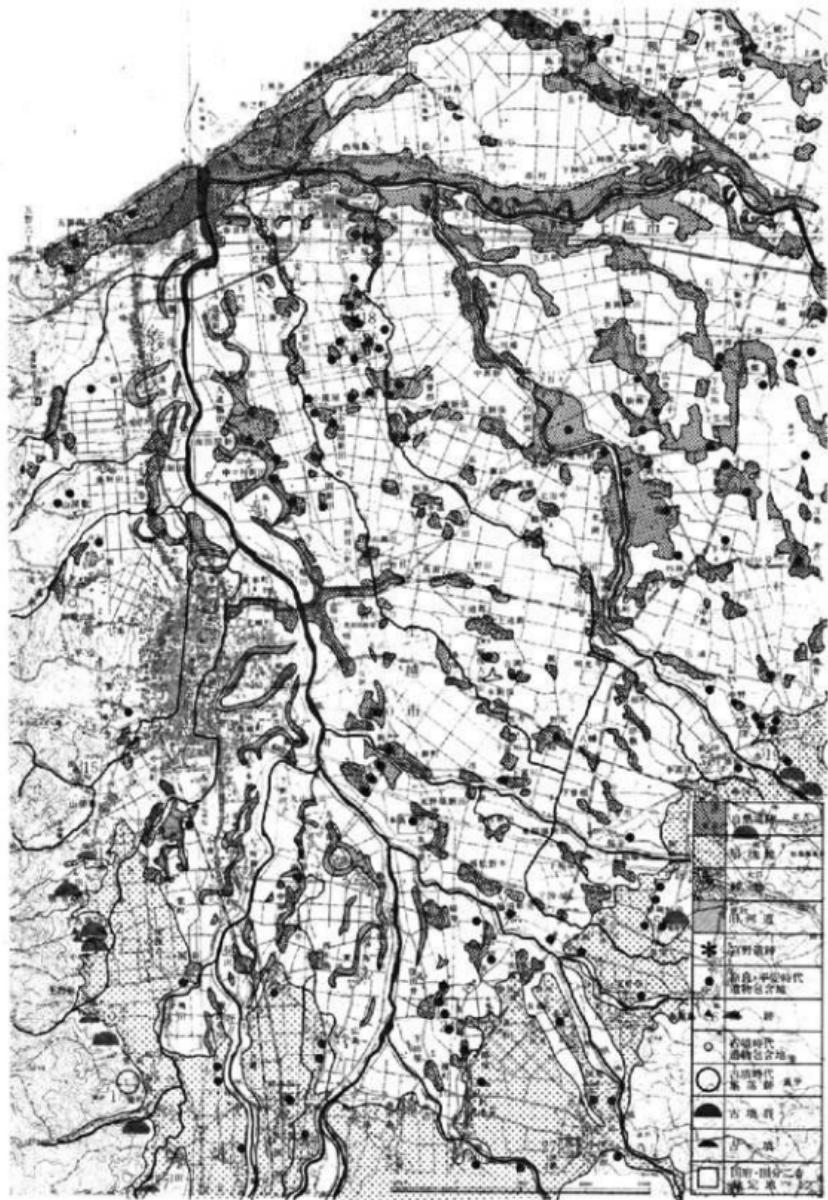
妙高山麓を源とする関川は、妙高山裾野に沿って北流し、関田山脈から流れ出る別所川・樋池川・飯田川・保倉川などの中小河川を合流して高田平野最大の関川に合流している。これらの河川は平野の出口に小扇状地を形成するのみで、大部分は潟町砂丘によって水の出口が阻止されたために、沖積面上をいくども蛇行し、自然堤防や河跡湖などを形成している。



第1図 遺跡の地形



第2図 周辺の遺跡分布  
(国土地理院「高田西部」「高田東部」「柿崎」1:50,000原図 昭和48年発行)



## 第2図 周辺の遺跡分布

高田平野の沖積面は段丘化した2段の段丘面（関川面・高田面）がある。関川面は高田面の下位に位置し、1m以上の比高差がある。関川面と関川の沈澱原との比高差は1~2mを測る。高田面は高田平野のはば全域をおおい、関川面は関川と矢代川にはさまれた地域と関川下流の右岸に部分的に見られる程度である。これらの面の段丘化は高田面が平安時代以降、関川面は中世末期と推定されている（高田平野団体研究グループ 1981）。

本遺跡は上越市三橋新田字宮野272番地ほかに所在し、標高約5mの高田面に形成された自然堤防上に立地している。遺跡の主体部は古代の須恵器・土師器等の遺物の散布状況や現地形の高低差等から調査対象地の北側の宅地を含む集落内にあるものと推定される。調査対象地の土地更正図（昭和18年作成）によると、調査対象地のはば中央部を北西から北東へ屈曲している水田帯がある（第3図）。水田帯は均一的な幅を持ち、平坦と区画されているものの、旧時はこの水田帯が河渠ないしは自然堤防内の小湿地とも考えられる。その後、水田帯は埋立てられ、宅地として利用されている（第1図）。この状況については、発掘調査においても再確認されている。

## 2. 歴史的環境

越後国の境域が定まったのは和銅5年（712）に出羽国が設置されてからで、越後国には頸城・三島・魚沼・古志・蒲原・沼垂・石船の7郡があったことは衆目が認めるところでもある。本遺跡の所在している上越市周辺は律令時代にあっては頸城郡のうちにあって、「倭名類聚抄」には都宇・栗原・厚木・板倉・高津・物部・五公・夷守・佐味の10郷が記載されている。今日まで先学によって式内社と祭神・郡郷・物部氏との関連・頸城国造の成立・国府と条里・莊園など種々文献学的に研究されてきたが、いまだ定説というものはない。このため、先学の研究



第3図 字宮野更正図（部分）

を基として周辺遺跡の状況を加味して、本遺跡を含む高田平野周辺の歴史的環境を記述することにする。

本遺跡をとりまく高田平野の古墳時代および奈良・平安時代の遺跡の分布は第2図の如くである。なお、奈良・平安時代については新潟県内の須恵器の研究が立ち後れているために明確に区分することはできず、便宜的に奈良・平安時代とした。

古墳時代の遺跡は古墳と遺物包含地に区分され、遺物包含地は8ヶ所、古墳は約200基確認されている。斐太(1)は古墳時代前期の集落跡で、71基の住居で構成され、その住居を囲むように溝が巡らされている。いわゆる山頂環濠集落跡と呼ばれているものである。古墳は県内でも有数の規模と数をほこる頭城古墳群と総称され、高田平野をはさんで東南グループと西南グループに大別される。東南グループは間田山脈から流れ出る飯田川・櫛池川によって形成された扇状地を中心に分布する古墳群で、菅原古墳群(5)を最大規模として大塚(6)・高士(4)・宮口(3)・水科(2)等の古墳群である。この中でも昭和50年に牧村宮口地区と三和村水科地区的圃場整備事業にともない、水田中に存在した古墳群の発掘調査が実施され、宮口古墳群第11号墳からは金銅装円頭大刀が出土し、頭城古墳群について大きな手懸を与えている(牧村教育委員会1976)。西南グループは関川の左岸段丘上の原通古墳群および矢代川左岸や南葉山山麓裾野の丘陵先端部・丘陵上に立地する古墳で梨ノ木(7)・天神堂(8)・親音平(9)・青田(10)・福荷山(11)・南山(12)・黒田(13)・灰塚(14)と南北に連続するように分布している。この2つに大別される古墳群はいずれも古墳時代後期に属するものと考えられている。なお、遺物包含地では、三和村の水科古墳群では2枚の文化層が確認され、下層から和泉式土器に併行する遺物が出土している(高田平野団体研究グループ 1980)。これらのことから古墳時代の遺跡は高田平野にまだ埋没している可能性が多分にあるものと思われる。今後の調査・研究を待ちたい。

奈良・平安時代の遺跡はその種別から遺物包含地・須恵器窯跡それに国府・国分寺推定地などに別けられる。立地別に見ると扇状地25ヶ所、洪積台地6ヶ所、砂丘地3ヶ所、沖積面の自然堤防上78ヶ所となり。この時代になって扇状地および沖積地は人間が居住するのに可能であったことが顕著にうかがわれる。遺物包含地が数多く分布している沖積地は先述したように高田面と関川面に区分され、高田面の段丘化を平安時代以降、関川面の段丘化を中世末期と推定し、関川面については遺跡の分布と出土遺物から人間が居住可能になったのは鎌倉末期ないしは室町時代前半と考えられている(高田平野団体研究グループ 1980)。近年遺跡分布調査や発掘調査が県教育委員会や上越市教育委員会によって実施され、高田面の自然堤防上に該期の遺跡が多く分布していることが判明し、榎井B(16)・片津中之島(17)・宮野(18)・下中坪(19)・子安(20)・下新町(21)の各遺跡から平安期の灰釉陶器片が採集されている。これらの集落跡と推定される遺跡に須恵器などを供給したかとも考えられる窯跡は沖積地の西側、西頭城丘陵に5基確認され、向橋(15)は須恵器と平瓦を焼いている窯跡で、国分寺等の差換え瓦の生産地として注目されてい

る。(高田市文化財調査委員会 1969) また、本図幅以外になるが東顕城丘陵の裾野、三和村の神田から浦川原村今郷にかけては須恵器窯跡が存在し、高田周辺部で最大規模をほこる一大窯業地帯と推定される。三和村の長峰窯跡群からは土馬(飾馬)が、浦川原村今熊窯跡群からは子持の注ぎ口を有する長頸壺が出土している。國府および国分二寺については今日まで先学によつて、上越市善光寺浜周辺<sup>23</sup>・三和村法花寺周辺<sup>24</sup>・板倉町田井周辺<sup>25</sup>・新井市堂庭周辺<sup>26</sup>・同国賀周辺<sup>27</sup>・板倉町国川周辺<sup>28</sup>・上越市長者原周辺<sup>29</sup>・新井市栗原周辺<sup>30</sup>のほか妙高市今府周辺など種々の説があるが、いまだ定説といつものはない。また、条里遺構については高田平野全域を調査したものではないが、高田平野北部に存在し、その施行年代は奈良時代のものか、或は平安初期のものが不明であるとしながら、荒川の東側周辺の氾濫の被害が少ない地域に坪割遺構が見える(多賀 1972)といわれている。今後、明治年間に作成された土地更正図を収集し、検討する必要があろう。

このように、高田平野周辺部は古墳時代の後期には開川の支流の谷口扇状地を中心に古墳が造営される基盤がすでに存在し、越後における先進地域の一つとして把握される。そして、この先進地域が、律令期に包括されていったものと推定される。特に國府・国分二寺の所在地は別としても灰釉陶器・瓦・土馬等の出土遺物や沖積地内の遺跡で検出される遺構群から高田平野を中心とした地域は律令期においても先進地域であったと思われる。

本遺跡をとりまく自然堤防上の遺跡の分布は第2図の如くであるが、調査対象地周辺部の遺跡について詳細に見てみると、その時代は古代と中世のもので、両時代のものが混在して採集されるケースが多い。本遺跡の立地する自然堤防上の荒屋・東小猿屋・大野・三ツ橋新田・三橋・福田にかけては、畠地や水田の畔から稀薄ではあるが、帶状に連続して須恵器・土師器、中世陶質土器が採集される。この中でも、三ツ橋・三ツ橋新田地内は遺物量多く、その散布範囲も広い。戸野目川によって形成された自然堤防上にある門田新田・小猿屋新田・三田・安江・春日新田にかけては畠地から若干の須恵器・土師器・中世陶質土器が単発的に採集され、その面積も狭少である。また、三田の西側の水田から耕地整理の際に須恵器が出土している。しかし、安江から春日新田にかけては宅地化が急速に進んでいるため、遺跡が所在しているのか否か明確にすることはできなかった。開川の右岸、高田面の段丘崖上にある上幡田・寺・大日・富岡では稀薄ではあるが、広範囲にわたって須恵器・土師器・中世陶質土器が採集される。特に富岡の農業協同組合倉庫周辺には多量の遺物が散布している。このように見ると、高田面上の自然堤防上には必ず遺跡が存在する可能性が多分にある。さらに発掘調査を実施した遺跡は数少ないが、各々の自然堤防上には必ず核となるような遺跡があるものと推測される。遺物の採集される地点は水田中に残された畠や屋敷廻、それに水田でも周辺よりも若干高く、水のかかりの悪い水田で、近世から行なわれている開田や耕地整理によって遺跡自体は相対的に荒れているものが多い。

### III 発掘調査

#### 1. 調査の方法とグリッドの設定 (第4図)

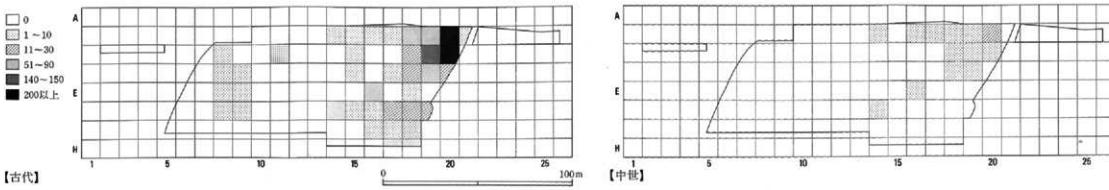
発掘調査は昭和55年に上越市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査の際に遺物（土師器・頃窓器）を採集した畠地を含む宅地の高速道路法線内を主対象地とした。さらに、主対象地の北東側の水田部の一部と県道小猪屋・黒井停車場線をはさんだ南西側水田部の一部をも調査の対象範囲とした。しかし、現状はすでに住宅が移転したり、畠地が放棄されたりして荒地化し、一部は工事用砂置場として利用されていた。

このため本調査に先立って法線内の中央部に北東から南西に向かって延長45m、幅2mのトレンチをバックホーで掘り下げ、遺構・遺物の有無と層序を確認した。この結果、遺物包含層はほとんど耕作や住宅建設などでこわされて残存していないことが判明した。また、遺構の上部はすでに破壊され、基底部のみが残存していることが判明し、調査対象地内にかなりの遺構が存在する可能性が多分にあるものと思われた。調査対象予定地は一部工事用砂置場として利用されていたために、砂の除去にはかなりの時間が必要となり、全体的試掘調査は全くできなかつた。このような状況のため全体的に遺構・遺物がどんな状態にあるのか否か、全く不明に近いものであった。

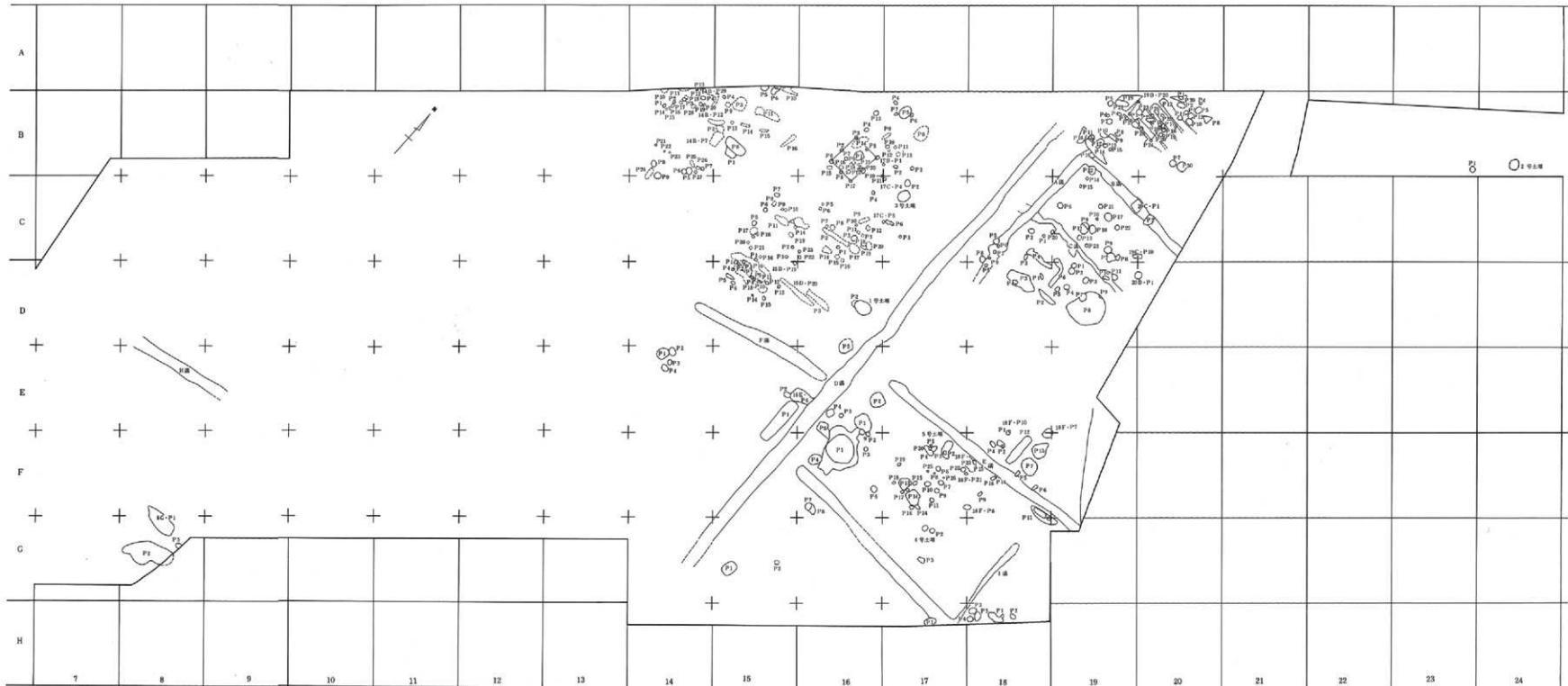
工事計画がさせまっていたことと、県教育委員会の年間発掘日程が決まっていたので、調査は工業用の砂を除去した範囲にグリッドの基準線を基本にトレンチを設定し、遺構や遺物の遺存状況に応じて周辺部の拡張ないしは全面発掘に切り替えて行く事を基本とした。土砂の移動や表土処理については重機やトラックを積極的に使用することにした。遺構のうちピットはグリッドごとに番号を付し、状況に応じて2分割ないしは4分割で掘り下げるにした。また、溝等の断面はその状況に応じて適宜残すこととした。平面図・断面図などの実測図類は基本的に縮尺20分の1でとることにした。



第4図 グリッド設定図



第6図 遺物の分布密度

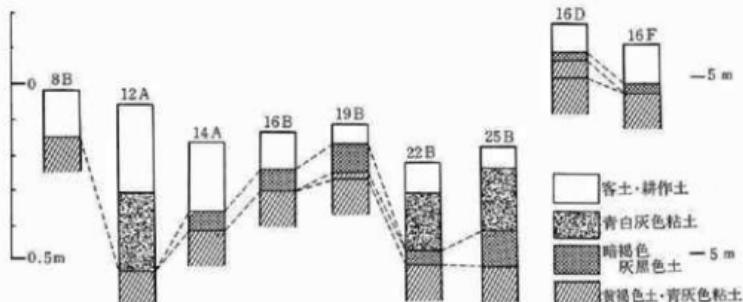


第5図 遺構全測図

グリッドは、延長300m、幅60mの法線内に第4図のように設定した。グリッドは10m×10mを一区画として、南西から北東へ1・2・3、北西から南西へA・B・Cとし、数字とアルファベットの組合せをもってグリッドの名称とした。なお、調査対象地内の中江用水敷および県道小猿屋・黒井停車場線用地内は発掘調査の対象から除外した。

## 2. 土層と遺構・遺物 (第5・6・7図)

本遺跡の土層堆積は第5図のようになるが、宅地の建設や廃棄、畑地の耕作等で地山の黄褐色砂質粘土層まで搅乱されている所が大半を占めている。基本層序は畑・宅地では表土(灰黒色土)、暗褐色土、黄褐色砂質粘土となり、水田では耕土の下は青灰色粘土、灰黒色粘土になっている。黄褐色砂質粘土はB-E-16-19ラインで一番高く、漸次南・東・西側へ低くなっている。9-12ラインは水田を埋立てた地域で黄褐色砂質粘土が低くなり沢地状を呈している。7Dの北西部では黄褐色砂質粘土が崖状におち、青灰色砂質粘土となる。7Dが一応遺跡の西限と考えられる。古代・中世の遺物は暗褐色土・灰黒色粘土から混在して出土しているが、その分布範囲は明らかに異なっている。古代のものが沢地を除いた地域からまんべんなく出土しているのに対し、中世の遺物は14-20-B-Dにはば限られている。特に古代の遺物は19-20-B-Cライン、14Fに集中している。遺物包含層は基本的に標高の高いB-E-16-19ラインでは薄く、周縁部へ行くに従って厚くなり、遺物量も多いといえる。遺物の分布密度と遺構の分布を見てみると、遺構の存在している所には遺物が出土し、遺構が集中している地域に遺物も集中している。地山の黄褐色砂質粘土の高低から、黄褐色砂質粘土が高度を下げる緩傾斜面に遺構・遺物が集中しているといえる。しかし、遺物の出土状況から遺構と遺物の関係やその時代等相関的関係は不明確であると言わざるを得ない。



第7図 土層柱状図

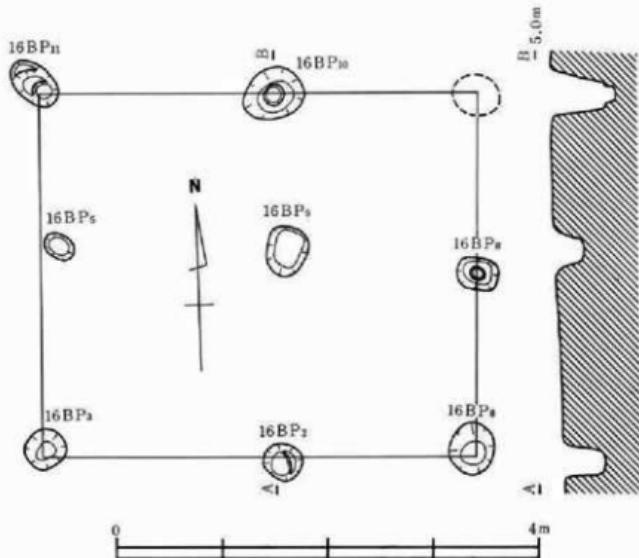
## IV 遺構・遺物

本遺跡の発掘調査で検出された遺構は、建物跡3棟、溝9本、土壙5基、ピット約300個である。遺構の性格等については、調査対象地が遺跡本体の縁辺部にあたることと、宅地造成等により遺跡自体が荒されていたことにより明確に把握することはできなかった。

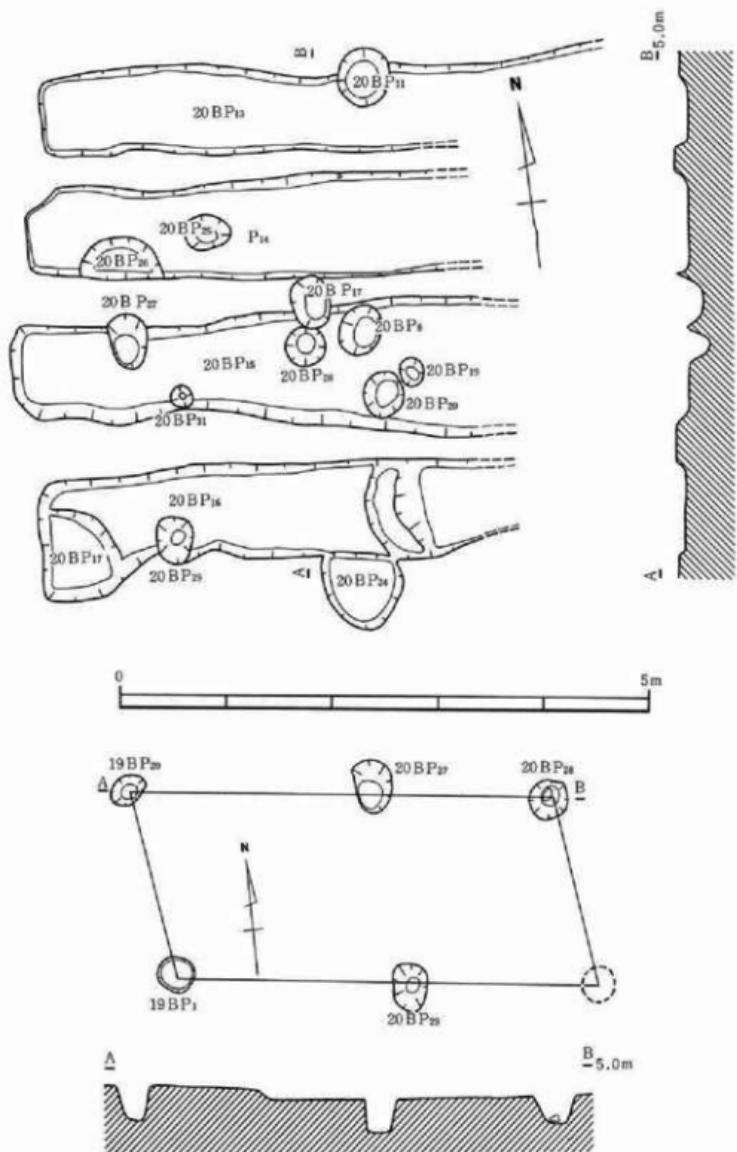
### 1. 建物跡

1号建物跡（第8図、図版第7図上） 16Bグリッドで検出され、東西2間（4.1m）×南北3間（3.4m）の総柱掘立柱建物である。東西の柱間は不均等であるのに対し、南北の柱間は均等になっている。掘形は円形および梢円形を呈し、底面は二段底になっているものが多い。P<sub>5</sub>は径25cm、深さ17cmを。他のピットは径30から60cm、深さ30～65cmを測る。P<sub>3</sub>からは土師器・須恵器が出土しているが、細片のため図示できなかった。

2号建物跡（第9図上・10図、図版第7図下） 20Bグリッドで検出されている。4条の溝が幅20～30cmの間隔をもって平行に並び、柱掘方と考えられ、溝の長軸は東西より北へ7度ふれていて。東端は擾乱を受けているため、溝の全長は不明である。幅85～110cm、深さ10～22cmを測る。建物跡柱掘方が溝状の類例としては千葉県日秀西遺跡（千葉県教委他 1980）の22・24・25・31号建物跡が、県内では中頬城郡袖崎町木崎城跡2号建物跡がある。



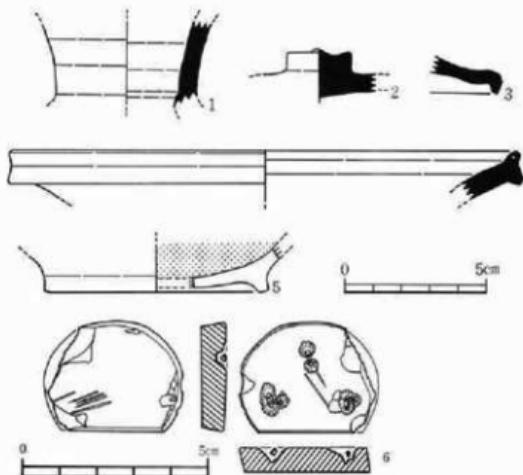
第8図 1号建物跡



第9図 2号建物跡(上)・3号建物跡(下)

遺物としては須恵器・土師器・石製鉢帶が検出され、1～4は須恵器、5は土師器、6は石製鉢帶である。1は頸部が細くしまり、口頭部が外反する長頸壺の口頸部である。内外面ともにロクロナデ調整され、胎土には細砂粒が混入されている。2は蓋のツマミ部で、ツマミは体部と接合されたものである。ツマミの形状は直径2.3cm、高さ0.8cmを測る扁平なもので、中央部がわずかに突出している。外面はロクロナデ、内面はヘラナデ調整され、胎土には砂粒が多く含まれ、灰色を呈している。3は蓋の口縁部で、端部は嘴状に内向している。内外面ともにロクロナデ調整である。4は甕の口縁部で口径18cmを測る。口縁は大きく外反し、内外面ともにロクロナデ調整で、内面には自然軸が湧出している。5は底径8cmを測る台付黑色土器で、後述する「IV、遺構外出土遺物 土師器」(梶Ba類)に相当するものである。6は石製鉢帶で、梢円形の下辺を直截した丸鞘で、表裏及び側面はていねいに研磨され光沢をおびている。裏面には2孔を一对とする潜り孔が3ヶ所に穿たれている。幅3.7cm、高さ2.9cm、厚さ0.65cmを測り、ストレート製である。

3号建物跡（第9図下、図版第7図下） 19・20Bグリッドで検出され、東西2間（4m）×南北1間（1.8m）の絶柱掘立柱建物である。柱間は不均等で平行四辺形を呈する。掘方は円形・梢円形を呈し、径30～45cm、深さ25～35cmを測る。2号建物跡と重複しているが、切り合い関係は不明である。遺物は出土していない。この建物跡は、図面整理時に1号建物跡柱掘方の計測値との比較により確認されたものである。



第10図 2号建物跡出土遺物

## 2. 溝

9 本の溝が確認され、H溝を除いて調査対象地の北東部 (60×50m の範囲) に集中している。溝の全体は大半のものが調査対象地外へ続いているため把握することはできなかった。いずれも黄褐色砂質粘土上面で確認され、おそらく上層の暗褐色土から掘り込まれたものであろう。遺物は溝の充満土中から混在して出土し、層位的に明確にすることはできず、絶対的年代は不明であると言わざるを得ない。

A溝 (第11・12図1～10、図版第8・16図20・17図1～8) 本溝の南端部は搅乱を受けているため、不明瞭である。ほぼ北から南に向って掘り込まれ、B溝に連結している。幅は80～320cm、深さは20～60cmを測る。断面は北側で中段に段をもち、U字状を呈し、底面は平坦になっている。断面c-dでは緩やかなU字状を呈している。溝の底面のレベルは中央部が若干高く、両端に行くに従って深くなり、その差は20～30cmをはかる。

遺物としては須恵器と土師器、中世陶磁器が出土しているが、土師器は細片となっているため國化できなかった。第12図1～7は須恵器、8は青磁、9は中世陶器である。1～3は杯で、1・2のように高台の付されないものと3のように高台の付されたものとがある。いずれも体部はロクロナデ調整で、底部の切り離しは1・2が回転ヘラ切り、3は回転糸切りである。4は蓋で口径13cmを測る小形のもので、口縁先端部を嘴状に折り上げている。外面ともロクロナデ調整で、口唇部外面には自然釉が湧出している。5は口径11cmを測る壺の口頸部で、頸部はほぼ垂直に立ち上り、口唇部先端は外方へ引き出されている。6～7は壺ないしは壺の胴部片で、6には平行叩目が施された後に平行カキ目が、7の表裏には平行叩目が施されている。8は船載品の青磁碗で、器面に素弁蓮華文が描かれ、胎土は灰白色で、釉は翠青色を呈している。9・10は珠洲系陶器の壺で、条線状叩目が施され、叩目の間隔は幅3cmで9が9条、10が8条を数える。

B溝 (第11・12図11～13、図版第8・17図9～11) 本溝はA溝の北端で連結し、西から東に向って掘り込まれている。幅は60～190cm、深さは20～30cmを測り、断面は緩かなU字状を呈している。溝の底面のレベルは東側が高く、西側が低くその差は17cmを測る。本溝の規模はA溝に極めて近似し、断面も類似していることなどの点からA溝と連結して一つの機能をはたしたものと考えられる。

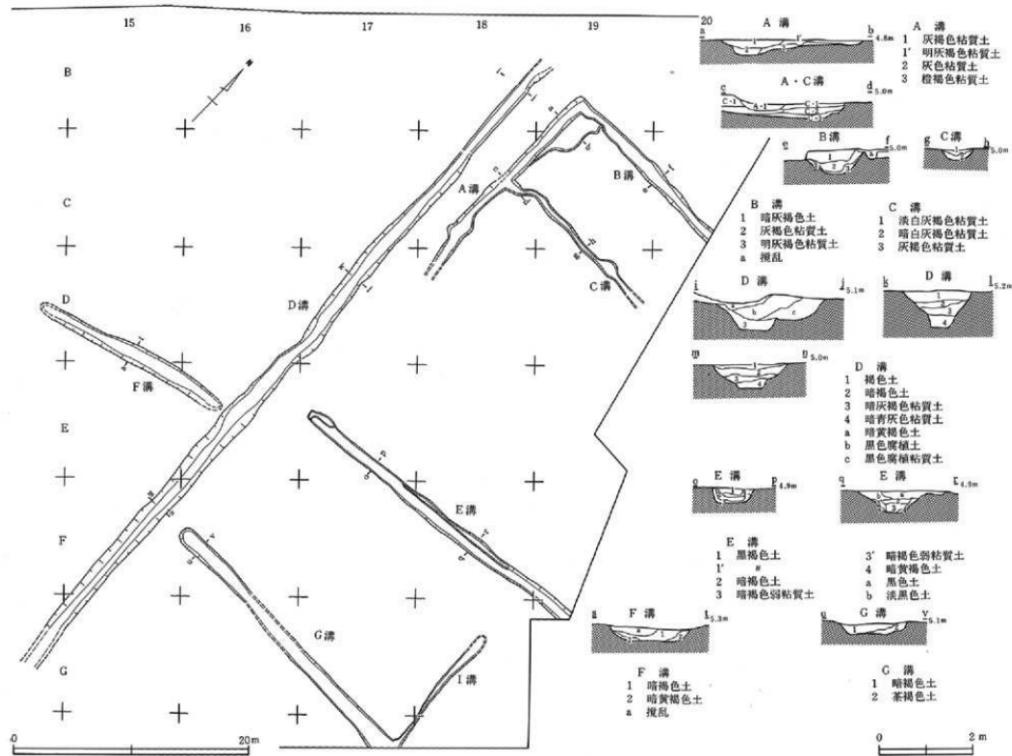
遺物としては須恵器、土師器、中世陶器が出土している。第12図11は須恵器、12は土師器、13は中世陶器である。11は壺の口頸部で大きく外向している。口縁部は複合口縁状を呈し、外面には粗雑な波状文が描かれている。胎土には砂粒が混入され、暗灰色を呈している。12は碗の底部で楕Ab頸に属し、底径5.2cmを測る。13は珠洲系陶器の壺の胴部下半である。胴部下半は一次的に全面にわたって条線状叩目がなされた後、底面から胴部下半にかけてロクロナデ調整が行われている。

C溝（第11・12図14～16、図版第8・17図12～14） 本溝はA溝に圓面上は連結しているが、A溝のc-d断面を見るとA溝より古い段階のものである。西から東へ向って掘り込まれ、西側は住宅の便槽下へ連続しているもののD溝には達していない。直線的ではなく、途中で屈曲している。幅は40～70cm、深さに15～30cmを測り、断面は緩かなU字状を呈している。溝の底面のレベルは西側が高く、東側が低くその差は10cmを測る。本溝は確認し得た溝の中で、幅は狭くて深さもなく、その形態も曲線的で、他の溝とは性格を異なるものであろう。

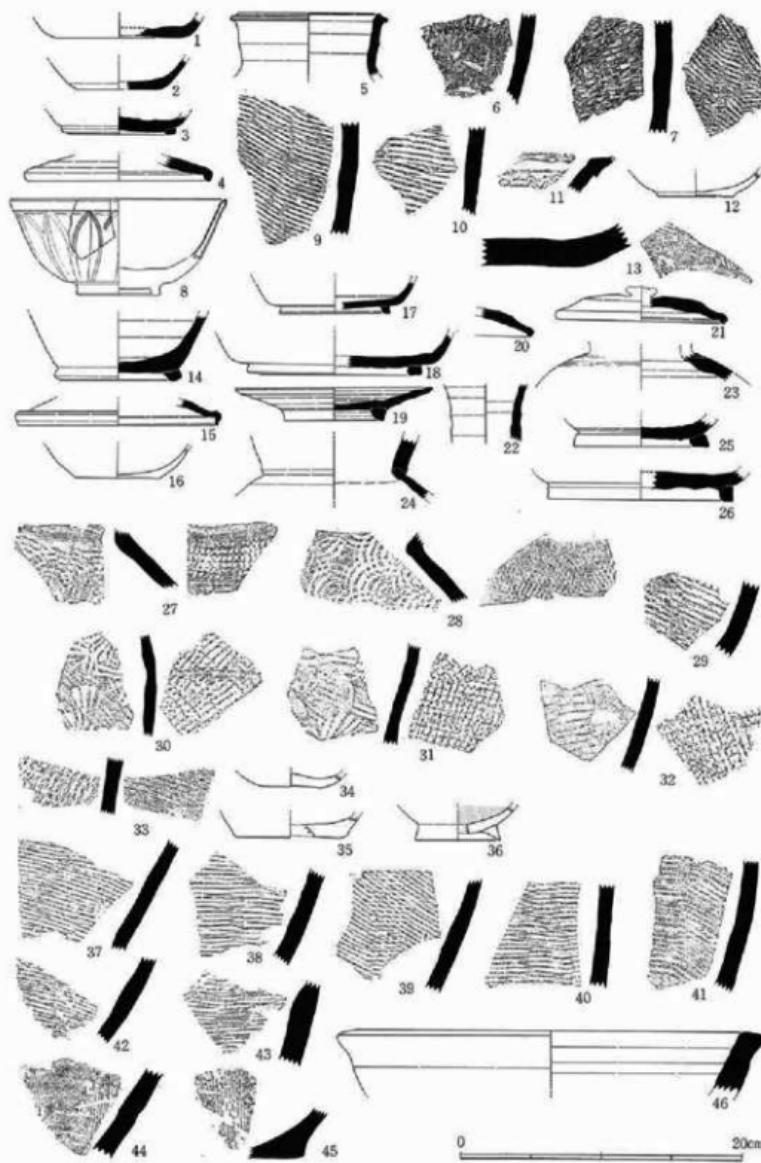
遺物としては須恵器と土師器が出土している。第12図14・15は須恵器、16は土師器である。14は長頭壺の胴部下半と考えられ、高台は外方へ強くふんばるように付されている。底部の切り離しは不明であるが、高台の付された内周縁は指頭でナデられている。15は口径14.2cmを測る蓋で、天井部からゆるく下り、口縁部で強くくびれ、比較的腰の高い蓋と思われる。内外面ともにロクロナデ調整で、茶褐色を呈している。16は碗Aa類の体部下半で、底部から口縁はゆるやかに内彎して立上っている。器厚はうすく仕上げられ、胎土に砂粒が混入され、赤褐色を呈している。

D溝（第11・12図17～46・第13図1・2、図版第9・17図15～36・18図1～5） 本溝は北から南へ向って掘り込まれ、南北両端とも調査対象地外へのびているものと思われる。幅は100～230cm、深さは50～70cmを測り、断面はV字状を呈するものの、東西で傾斜角度が異なり、西側が緩傾斜になって中段に段を有している。北側ではi-jの断面図の如く、幅約220cm、深さ52cmの溝（法線外にある高橋家住宅の周間にめぐる溝）によって立切られ、底面が残存している。a～cからは近現代陶磁器・ガラス等が出土している。溝の底面は平坦で、レベルは北側が高く、南側が低くその差は10cmを測る。

遺物としては須恵器・土師器：中世陶器が出土している。確認し得た溝の中で、一番遺物量が多い。第12図17～33が須恵器、34～36が土師器、37～46が中世陶器である。17・18は杯で高台が付されている。両者とも内外面はロクロナデ調整で、17の内面には体部と底面を画するかの如く棒状工具で沈線が一条引かれている。18は底径12.4cmを測る大形の杯である。19は皿で口縁が底部から大きく外向し、高台は厚くしっかりと付されている。体部はロクロナデ調整で、底部内面はヘラでナデされている。20・21は蓋で、21は天井部がヘラ削り、肩部から口縁部はロクロナデ調整されている。口縁部は丸く内側へまるめ込まれている。22は長頭壺の頭部である。23は壺の胴部上半で、肩部が丸くなじて肩となり、球形に近い胴部を呈するものであろう。頭部下半から肩部上半にかけては刷毛目調整され、これ以下はロクロナデ調整である。24～33は甕で、24は口頭部、25・26は底部である。25の高台は外方へふんばるように付され、高台の接合面上部には沈線が引かれている。おそらく接合面を消すために引いたものであろう。高台の形態・胴部の立ち上りなどから長頭壺の底部とも考えられる。27～33は胴部で、27・33は同心円文と格子目、28は同心円文と平行線、30・31には花弁状叩目と格子目、32は平行線と格子



第11図 溝 (A~G・I溝)



第12図 溝出土遺物 (A ~ D溝)

目の叩目が施されている。34～36は楕の底部で、34はAa類で底部は掲底を呈している。35はAb類、36はBa類の黒色土器で、高台は外方へ張り出している。37～43は珠洲系陶器の壺の胴部である。条線状叩目は幅3cmで9～10条を数え、39・41は矢羽根状に叩かれている。44・45は擂鉢で、44の擂目は12条、45は11条を1単位としている。46は小破片のため擂鉢か鉢のいずれかであろう。第13図1・2は用途不明の石製品である。1は粘板岩質で、擦痕が3面に、溝状の磨痕が2面に見られる。2は滑石で、幅5.8cm、厚さ2cmを測り、5面に擦痕が見られる。

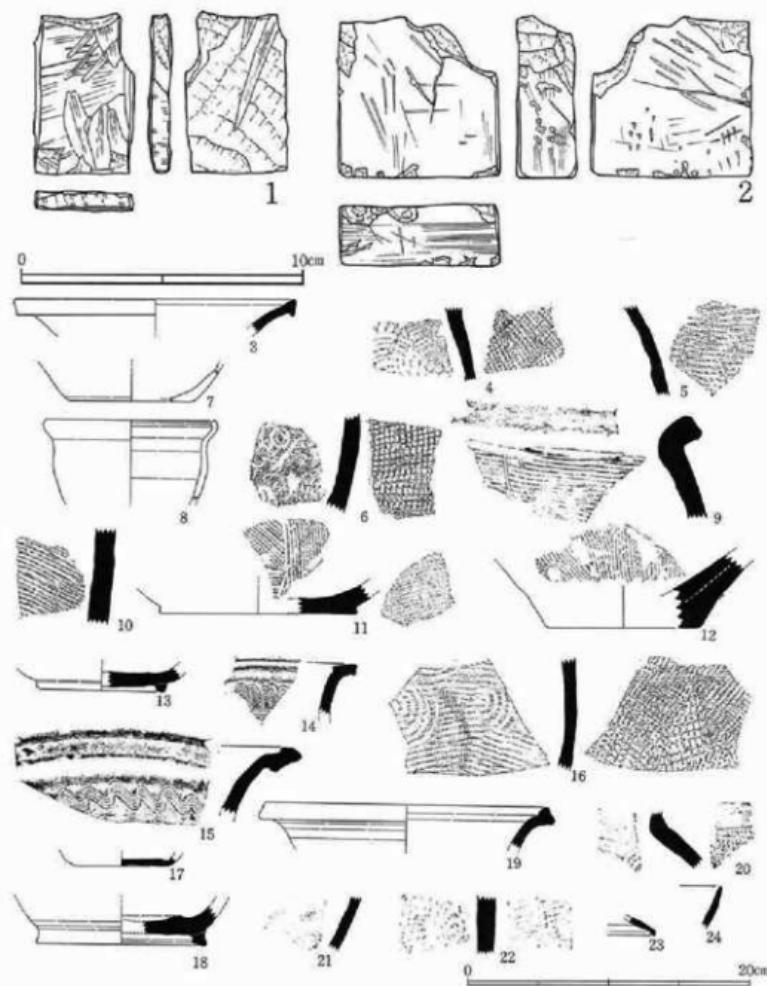
E溝（第11・13図3～12、図版第9・18図6～18） 本溝は西から東に向って掘り込まれ、東端は更に東側へ続いている。西端及び中央部の北側に段がある。幅は100～150cm、深さは30～40cmを測り、断面は西側で緩かなU字形を、中央部では中段に段を有すV字形を呈している。溝の底面は平坦で、レベルは西側が高く、東側が低く、その差は40cmを測る。

遺物としては須恵器・土師器・中世陶器が出土している。第13図3～6は須恵器、7・8は土師器、9～12は中世陶器である。3は口頭部が広く外反し、口唇部が外方へ引き出された壺で、内外面ともにロクロナデ調整で、外面には自然釉が湧出している。4～6は壺の胴部で、2・4は内面に同心円叩目、外面に格子目叩目が、5の内面には同心円叩目、外面に平行叩目が施されている。7は楕Aa類の底部で器厚は薄く、底面は回転糸切りで切り離されている。8は壺D類で、口縁はゆるく内凹気味に立上り、口唇部は内側へ折り上げられている。胴部がわずかに張り、下半はすぼむ小形のものである。9～12は珠洲系陶器である。9は短かい口頭部が直立気味に立上り、口唇端部は角縁となっている。口頭部は内外面ともにロクロナデ調整され、頭部直下から条線状叩目が施されている。頭部直下の叩目の上に棒状工具による沈刻線が2条引かれている。10は壺の胴部片、11・12は擂鉢で11の擂目は「米」の字状に施され、底部の切り離しは静止糸切りで、再調整はされていない。

F溝（第11・13図13～16、図版第10・18図19～26） 本溝は東から西に向って掘り込まれているが、両端とも搅乱されており全長は不明である。幅は110～160cm、深さは20～30cmを測り、中央部が若干ふくらんでいる。断面は緩かなU字形を呈している。溝の底面は平坦で、レベルは東側が高く、西側が低く、その差は10cmを測る。

遺物としては須恵器が出土している。第13図13は高台の付された杯である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、高台の接合面周縁はナデ調整されている。14～16は壺で、14・15は外反する口頭部で、口縁は複合口縁状を呈し、外面には回転台を用いて描いた5条一単位の波状文が描かれている。16は胴部で、内面に平行叩目と同心円叩目、外面に格子目叩目が施されている。

G溝（第11図、図版第10図） 本溝はI溝と連結しているが、西から東に向って掘り込まれている。幅は100～170cm、深さは20～30cmを測り、断面は緩かなU字形を呈している。溝は途中で浅くなっているが、底面のレベルは西側が高く、東側が低くその差は7cmを測る。土師器・須恵器の細片の他に鉄滓が1点（図版18図27）が出土している。



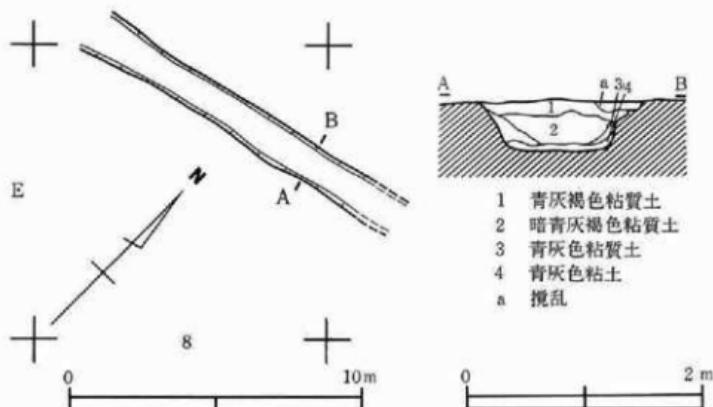
第13図 溝出土遺物 (D ~ F・H・I溝)

H溝（第13図17～22・14図、図版11・18図28～34） 本溝は調査対象地の西側E 8で単独に検出されたもので、西から東に向って掘り込まれ、東側は旧水田によって擾乱を受けている。西端は湿地帯に入っている。幅は110～150cmで、深さは30～40cmを測り、断面は緩かなU字形を呈している。底面は平坦で、レベルは東側が高く、西側が低く、その差は5cmを測る。

遺物としては須恵器が出土して、第13図17は杯で底部の切り離しは回転ヘラ切りである。18は長頸壺の底部と考えられ、胴部はロクロナデ調整である。19～22は壺で、19は外反する口頭部、20～22は胴部で、20は内面に平行叩目・外面に格子叩目、21は内面がロクロナデ、外面が格子叩目の上にカキ目が、22は内面に同心円文・外面に平行叩目が施されている。

I溝（第11・13図23・24） 本溝はG溝に直交して連結し、北から南に掘り込まれている。幅は北側で広く、南側へくるにしたがって細くなっている。深さは15cm内外で、断面はU字形を呈し、底面は北側が高く、南側が低く、その差は15cmを測る。

須恵器の杯・蓋片が出土している（第13図23・24）。細片のため全体は不明であるが、内外面ともにロクロナデ調整で、蓋の口縁端は折りまげられて内傾している。

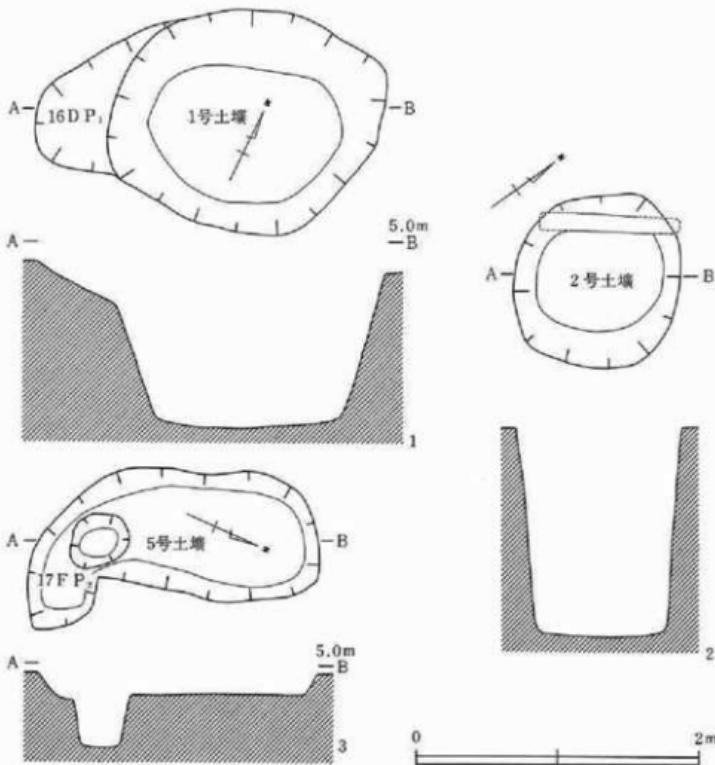


第14図 溝（H溝）

### 3. 土 壤

5基確認され、井戸の可能性の強い円形もしくは梢円形の土壙（1～4号）と機能は不明であるが須恵器の長頸壺が出土した小判形の土壙（5号）がある。

1号土壙（第15図1・第16図1～6、図版第12図・16図6・7・19図18～20・22図10）本土壙は16Dグリッドで検出され、平面形態は梢円形で断面は逆台形をしている。長径206cm、短径156cm、深さ117cmを測る。上面の北側は16D P<sub>1</sub>（新しい落ち込み）によって切られている。埋土は崩壊したために実測はできなかったが、上層は灰褐色土や黄褐色土が3～4層に分かれ、レンズ状に堆積していた。下層は暗褐色土が厚さ50cmほどあり、一時に埋まったものと考えられる。底面には人頭大の割石が投げこまれたかのようにあり、その上面に接して土師器や須恵器が出土した。木製の井戸枠はないが、形状・深さ、割石（井戸のマナコ？）などから本土壙は井戸跡と



第15図 土壙（1・2・5号土壙）

考えられる。

遺物としては須恵器と土師器がある。第16図1～3は須恵器の要で、1・2は底部の周縁をていねいに打ち欠いている。2の高台の内面は円滑に磨かれ、墨が付着している。高台の外面にも墨が流れ落ちた痕跡がみられ(図版第22図10)。転用鏡として使用されたものである。1にはこれらの痕跡は全く見られない。3は胴部片、図版第19図18は口頭部片である。第16図4～6は土師器の碗で、4・5は口径に比して器高が低い。4は碗Alb類で、体部は底部付近で一度くびれて内母気味に立上っている。5は碗Ala類で、底部からゆるく内母気味に立上り、口辺部は肥厚している。6は碗Bla類の黒色土器で、底部から内母気味に立上り体部中央付近で口縁が外反している。胎土には小砂利が混入され、器面は荒れている。

2号土壙(第15図2・16図7～14・17図、図版第13図・22図1～9・16～22)　本土壙は24Bグリッドで検出され、平面形態は円形で、断面はU字形を呈し、直径約120cm、深さ148cmを測る。確認面から約30cm下で東西に横たわる埋木があり、埋木を避けて構築したものである。内部の充満土は確認面から底面まで灰を含む黒色土である。遺物は古代と中世のものが混在して出土し、底面からは一点の遺物も出土しなかった。形態・深さなどから素掘りの井戸と思われ、時代は出土遺物から中世のものであろう。

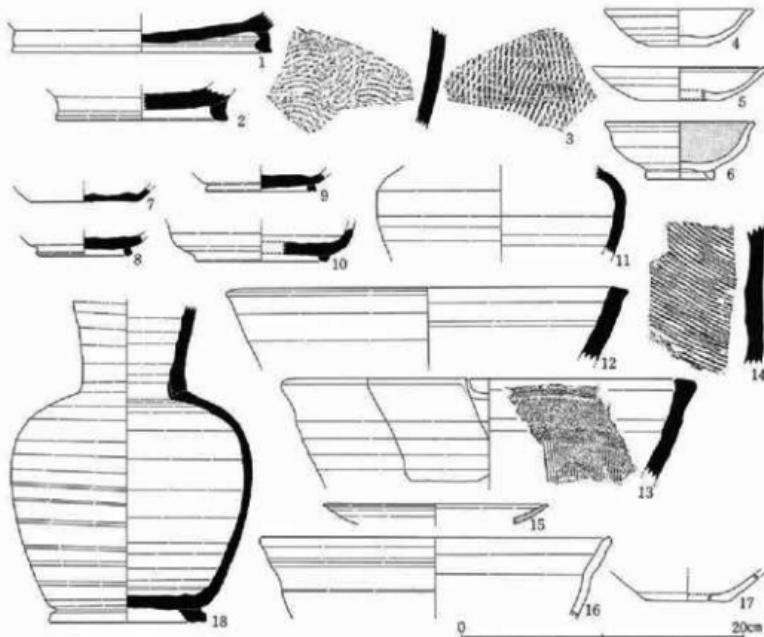
遺物としては須恵器と中世陶器がある。第16図7～11は須恵器で、7～10は杯である。7の底部の切り離しは回転糸切りで、底部周縁はナデされている。8～10は高台が付されたもので、底部の切り離しは8が回転糸切り、9・10は回転ヘラ切りで、いずれも高台内面の周縁部はナデおよびヘラナデで二次調整がなされている。11は長頸壺の胴部で肩部下半は回転ヘラ削り調整されている。図版第22図5は横瓶の胴部と考えられ、外面にカキ目が施されている。12～14は珠渦系陶器で、12は鉢、13は片口付擂鉢である。いずれも口縁の形態から鉢B類(IV-4参照)に属し、14の内面には1単位9条の描目が施されている。

木製品は7点出土しているが、用途については全く不明である。第17図1は板状を呈し、全長15.7cmを測る。上端には樹皮がついており、焦げている。左側面は平らに削られている。2は全長11.4cmを測り、長方形で板状を呈している。上端・下端は切断され左側面は平らに削られている。3は全長12.5cmを測り、板状を呈している。上半部は焦げ、下端部は切断されている。表面には削り痕が見られ、針が打ち込まれている。4は全長9.7cmを測り、角棒状を呈している。上・下端は切断されており、左側面には削り痕がみられる。5は全長5.4cm、厚さ約5mmを測る角柱状を呈し、上・下端は切断されている。四面ともに削られており、左側面に刃痕が見られる。6は丸太を半截したもので樹皮が付着している。上端は削り取られ、下端は切断されている。裏面には手斧による削り痕が見られる。全長10.5cm、幅5.2cmを測る。7は全長26.7cm、厚さ0.6cmを測り、著状を呈している。上・下端が尖り、断面が四角形を呈し、四面とも削り取られている。

3号土壙 17C グリッドで検出され、平面形は梢円形を呈している。壁面は垂直で、底面は平坦になっている。長径80cm、短径64cm、深さは132cmを測る。遺物は全く出土していない。

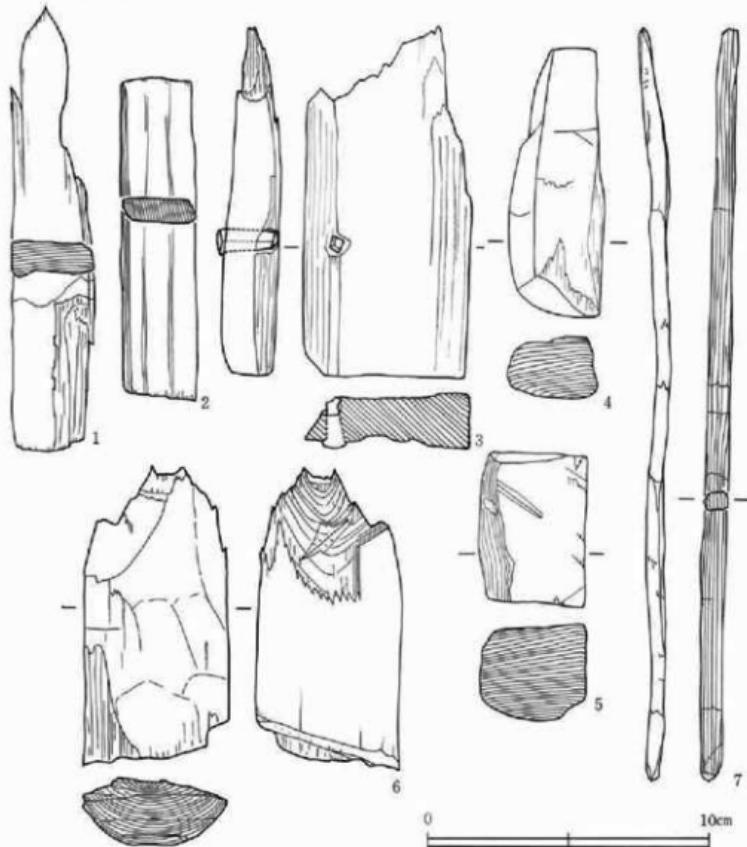
4号土壙（第16図15～17、図版第15図） 17F グリッドで検出され、長径80cm、短径68cm、深さは98cmを測る。平面形態は梢円形を呈し、壁面はほぼ垂直に切り込まれ、3号土壙と同じ形態をし、井戸の可能性が多分にある。

遺物としては須恵器・土師器の他に灰釉陶器が出土している。15は灰釉陶器の皿である。口縁は外方へ広く開き、口唇部先端で若干しづれて外方へつき出している。器面下半はロクロナデ調整で、釉薬は内面および外面の口縁部半まで淡黄緑色の釉が施され、それ以下は透明になっている。胎土は緻密で淡灰色を呈している。16・17は土師器で、16は口径約25cmを測る壺形土器である。頸部で屈曲し、口縁は内擣気味に立上っている。内外面ともにロクロナデ調整で、外面には煤が付着している。胎土には砂粒を含み、焼成は堅緻で一般的に言われている土師器とは胎土・焼成が異なっている。17は椀で、椀Ab類に属するものである。なお、須恵器は細片化しているため図示しなかった。



第16図 土壙出土遺物

5号土壤（第15図3・16図18、図版第15図・16図9） 17F グリッドで検出され、17 FP<sub>2</sub>と重複している。現状での平面形は不整形を呈しているが、本来は小判形をしていたものであろう。長軸202cm、短軸90cm、深さ15cmを測る。南壁付近からほぼ完形の須恵器の長頸壺が出土したほか土師器の細片が約20片出土している。第16図18は現高22.8cmを測る須恵器の長頸壺である。口縁は一部欠失しているが、頭部はほぼ外反気味に垂直に立ち上り、肩部はなで肩である。高台は外方にふんばるようにしっかりと付されている。内外面ともにロクロナデ調整で、外面および底部内面には自然釉が湧出している。高台の付された周縁・底部はヘラナデされている。土師器片は細片化しているため図示しなかった。



第17図 2号土壤出土遺物

#### 4. ピット

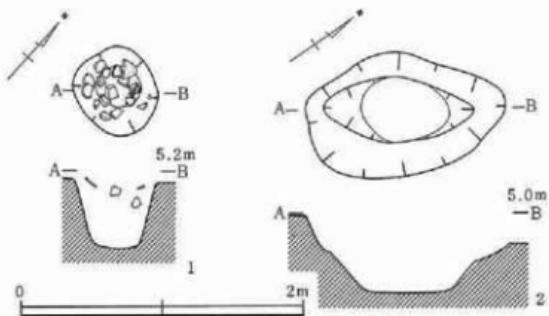
本遺跡で検出された落ち込みは約300を数え、これらは各グリッドごとにピット番号を付し、複数のグリッドにまたがる場合は所属面積の最も広いグリッド名を付した。ピット中で注意しなければならないものとしては柱穴の可能性の強いピット群がある。14 BP<sub>3</sub>・15 BP<sub>4</sub>・15 CP<sub>3</sub>・15 DP<sub>15</sub>・16 BP<sub>4</sub>・16 FP<sub>2</sub>・16 FP<sub>3</sub>・16 FP<sub>4</sub>・16 FP<sub>6</sub>・16 FP<sub>10</sub>・16 FP<sub>12</sub>・17 FP<sub>2</sub>・17 FP<sub>6</sub>・17 FP<sub>11</sub>・17 FP<sub>17</sub>・17 FP<sub>19</sub>・17 FP<sub>20</sub>・17 FP<sub>22</sub>・17 HP<sub>1</sub>・17 HP<sub>6</sub>・17 HP<sub>7</sub>・17 HP<sub>10</sub>・19 CP<sub>14</sub>・19 DP<sub>5</sub>・20 BP<sub>11</sub>・20 BP<sub>17</sub>・20 BP<sub>29</sub>で、これらは1号建物跡の柱穴の計測値との比較により、抽出したものである。間連するピットがなく建物跡としては把握できなかつたが、何らかの柱穴であった可能性が考えられる。特に16 FP<sub>12</sub>では柱痕が確認されている。

以下に若干の遺構説明を加えながら、ピット内出土の遺物をピットごとに順次挿図を中心にして記述する。

8 GP<sub>1</sub> (第20図1・2) 1は須恵器の杯で、内外面ともにロクロナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りで再調整はされていない。2は珠洲系陶器の壺胴部片で、条線状叩目が矢羽状に施されている。

8 GP<sub>2</sub> (第20図3~11、図版第19図1~9) 3~10は須恵器で、3は高台が付された杯で、高台は外方へふんばり、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、高台の接合面周縁はナデられている。4は壺の口頭部で内面に自然釉が湧出している。5~8・10は壺の胴部片で、同心円・平行叩目などが施されている。5は表面にカキ目が施され、横版の胴部であろう。10の外面は格子叩目、内面はナデ調整され、底部内面には自然釉が湧出している。底部はヘラで調整されている。9は口唇部に段を有する鉢で、内外面ともロクロナデ調整され、胎土は緻密で明灰色を呈し、焼成は堅緻である。11は土師器の椀底部で、椀Ab類に属す。

14 EP<sub>1</sub> (第20図12~14) 12・13は須恵器で、12は口径の小さい蓋である。天井部はヘラ削り



第18図 ピット (1. 16 BP<sub>12</sub>, 2. 17 HP<sub>1</sub>)

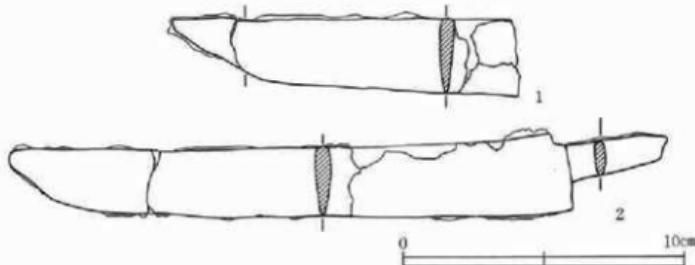
され、それ以下はロクロナデ調整である。13は壺の胴部で内面に同心円叩目、外面には平行叩目の上にカキ目が施されている。14は珠洲系陶器の壺脇部片で条線状叩目が施されている。

15 BP<sub>3</sub> (図版第19図10・11) 10・11ともに須恵器で、10は壺の口頸部である。11は高台の付された杯で、底部の切り離しは回転糸切りである。高台の接合面周縁は内外面ともにナデられている。胎土は緻密で灰白色を呈し、焼成も堅密である。

16 BP<sub>1</sub> (第20図15・16、図版第16図8) 深さ18cmの深いピットで、暗褐色土が堆積していた。15・16はともに土師器で、15はピットの底面に密着して出土した黒色土器である。椀 Bla 類に属し、口縁は内唇気味に立ち上り、高台は外方へ張り出している。胎土は荒く、小砂利を含む。器面が荒れているため整形手法等は不明である。16は壺の口縁で、外反し、口唇部は角張って面を持っている。整形手法等は15と同様不明である。

16 BP<sub>10</sub> (第18図1・20図17~23、図版第16図5・19図12~17) 本ピットは上層から須恵器・土師器片・焼削繰が混在して出土し、下層からは出土していない(第18図1)。第20図17~21は須恵器で、17は蓋である。ツマミは付されたもので、凝宝珠も扁平でわざわざに中央部が突出している。天井部はロクロナデ調整である。18・19は壺の胴部片で外面には格子叩目が施されている。18の内面は同心円叩と花弁状叩が組み合わさったような叩目が施されている。20・21は壺の底部で、20は小形の長頸壺の底部であろう。底面はともにヘラでナデられている。22・23は土師器で、22は椀 Ala 類に属し、口縁は内唇気味に立ち上り、口唇部は外反し、端部は丸くおさめられている。外面ともにロクロナデ調整である。23は椀 Ba 類の黒色土器で、高台は低く、その断面は三角形を呈している。胎土に小砂利を含んでいるためか、器面は荒く、整形手法等は不明である。

16 EP<sub>1</sub> (第20図24~26、図版第19図21・22) 24は須恵器の長頸壺の頭部で、内外面ともにロクロナデ調整で、接合痕が見られる。25・26はともに土師器の椀底部で、椀 Ab 類に属す。体部の立ち上りは底部付近でくびれて内唇気味に立ち上っている。器面調整は削減しているため不明



第19図 ピット出土遺物

である。

16 FP<sub>4</sub> (国版第19図30) 須恵器の壺の口頭部で、口縁は外方に引き出されている。ロクロナデ調整で、器面には自然輪が湧出している。

17 BP<sub>4</sub> (第19図1, 国版第22図14) 北壁付近上層より刀子が出土している。現長12cm, 刀幅2.6cmを測る平造りの刀子である。断片であるが17 BP<sub>5</sub> 出土の刀子と同様の形態を有するものであろう。

17 BP<sub>5</sub> (第19図2・20図27・28, 国版第19図31・22図15) 27・28ともに須恵器の杯で、内外面ともロクロナデ調整である。28は高台が剥落したもので、高台接合面周縁はナデ調整されている。底部の切り離しは回転糸切りである。第19図2は平造りの刀子で、全長23.5cm, 刀部の長さ20cm, 幅2.5cm, 厚さ0.6cmを測る。南壁付近より出土している。

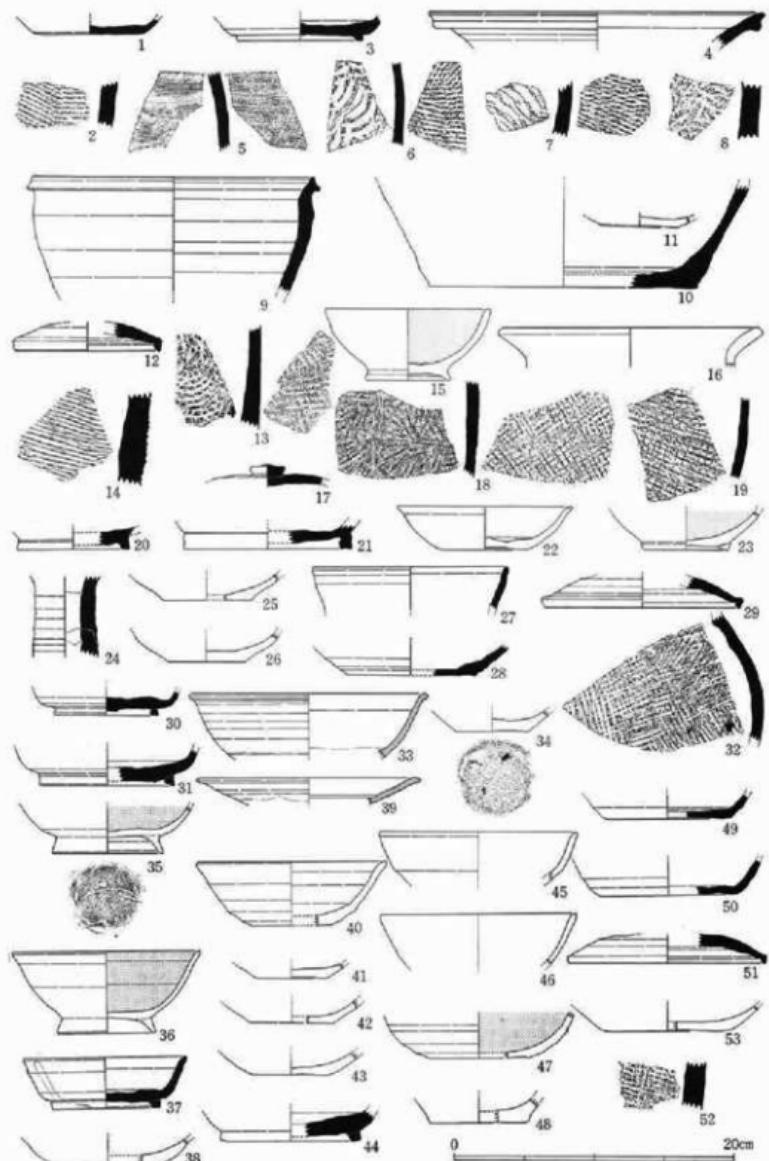
17 CP<sub>2</sub> (国版第19図32・33) 32・33は須恵器で、32は蓋である。天井部は回転ヘラ切りで、肩部から口縁まではロクロナデ調整で、口唇部は丸くおさめられている。33は杯で、底部の切り離しは回転糸切りである。口縁は底部でくびれて内壁気味に立上り、ロクロナデ調整である。

17 FP<sub>4</sub> (国版第20図15) 須恵器の椀の体部片で、内外面に暗黄緑色の釉が発光しているが、外面の体部下半まではかけられず素地を残している。回転ヘラケズリ調整され、灰白色を呈す。

17 FP<sub>3a</sub> (第20図29, 国版第19図34) ともに須恵器で、29は蓋である。天井はヘラ削りで体部はロクロナデ調整され、口縁は嘴状に内側へ折り上げている。国版第19図34は壺の胴部片で外面に平行叩目・内面に同心円叩目が施されている。

17 HP<sub>1</sub> (第18図2・20図30~36, 国版第20図1~6) 本ピットは柱穴の可能性のある2段底のもので(第18図2), 須恵器, 灰釉陶器, 土師器, 黒色土器が出土している。30・31は須恵器の杯で、高台が付されている。30の底部は回転ヘラ切りの後にナデられ、31は回転ヘラ削り調整が加えられている。国版第20図3・第20図32は壺の胴部で3の外面に平行叩目、内面に同心円叩目が、32の外面には方向を90度変えて叩いた平行叩目、内面に同心円文の叩目が施されている。33は灰釉陶器の椀で、口径16.7cmを測る。口縁は内壁気味に立上り、口唇は玉縁状を呈している。外面の口唇直下及び体部下半には釉がかからず素地を残している(国版第16図12)。内面は体部下半のみが素地を残している。灰白色を呈し、素地は淡赤褐色をしている。34~36は土師器の椀で、35・36は黒色土器である。34は椀A類に属する底部である。35は椀B類で、高台は外方へ張り出し、体部整形のうちに高台を付している。底部には回転糸切り痕を明瞭に残している。36は椀B II b類で、体部は緩く内壁して立上り、口唇は体部より若干肥厚している。いずれも器面は荒れている。

18 DP<sub>2</sub> (第20図37・38, 国版第20図8・9) 37は須恵器の高台付杯である。内外面はロクロナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。高台の接合面周縁はナデられ二次的調整がなされている。国版第20図8は壺の胴部片で外面に平行叩目が施されている。38は土師器の



第20図 ピット出土遺物

楕底部で、楕 Ab 類に属す。体部は底部付近でくびれて、内彎ぎみに立上っている。

18 FP<sub>1</sub> (第20図39、図版第16図14) 灰釉の段皿で口径14cmを測る。口縁は直線的に開き、内外面ともロクロナデ調整である。内面には棒状工具で段を有するかの如く浅いU字状の沈線が引かれている。淡黄緑色の釉が内外面にかかっているが、外面に素地が出ている所が部分的にある。素地は明灰色を呈し、緻密である。

18 FP<sub>2</sub> (図版第20図10) 須恵器の壺の副部片で外面に格子叩目、内面に同心円叩目が施されている。

18 HP<sub>1</sub> (第20図40~42、図版第20図11~14) いずれも土師器の楕で、40は楕 A II b 類に、41・42は楕 Ab 類に属す。40はロクロ整形痕が顕著で、体部の立ち上りは底部近くで一度くびれて内彎ぎみに立ち上り、口縁はゆるく外反している。胎土に砂利を多く含んでいる。

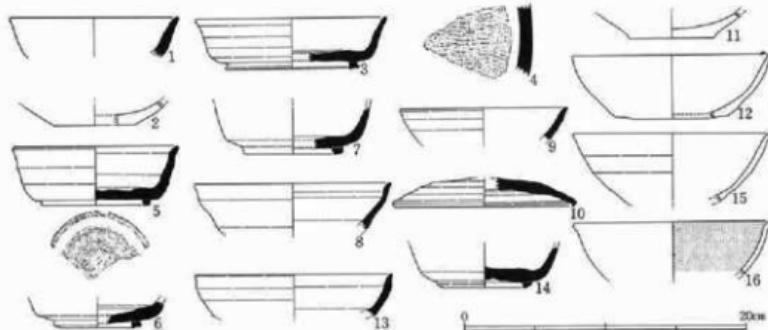
18 HP<sub>4</sub> (第20図43、図版第20図15・16) いずれも土師器の楕で、43は楕 Aa 類である。図版第20図15は楕の口縁で内彎気味に立上っている。整形手法等は器面が荒れているため不明である。

19 BP<sub>8</sub> (図版第20図17) 須恵器の高台付杯の底部で、外面には自然釉が湧出している。

19 BP<sub>12</sub> (図版第20図18) 珠洲系陶器の壺胴部片で外面には条線状叩目が施されている。

19 BP<sub>18</sub> (第20図44) 須恵器の壺の底部と考えられ、高台は外方へふんばるように付されている。底部からの立ち上がりから長頸壺の可能性もある。

19 CP<sub>2</sub> (第20図45~48、図版第20図19~22) いづれも土師器で、45・46は楕 A II 類に属し、体部中央で「く」の字状に折れて立上っている。いずれも底部を欠失しているが、器高の高いグループである。47は黒色土器で楕 Aa 類に属す。48は壺の底部で、底面には回転糸切り痕がある。胎土に砂粒を含み、赤褐色を呈し、焼成はやや軟弱である。



第21図 ピット出土遺物

19 CP<sub>5</sub> (第20図49, 図版第20図23) 須恵器の杯で, 体部はロクロナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, ナデ調整が二次的に加えられている。

19 CP<sub>7</sub> (第20図50~53, 図版第20図24) 50~52は須恵器である。50は杯で, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 二次調整が加えられている。51は蓋で天井は回転ヘラ削り, 体部はロクロナデ調整である。52は壺の胴部で外面には格子目, 内面には平行叩目が施されている。53は土師器の椀底部で, 椭A類に属す。

19 CP<sub>11</sub> (第21図1・2) 1は須恵器の杯で, 内外面ともにロクロナデ調整である。2は土師器の椀底部で, 椭Ab類に属す。

19 DP<sub>7</sub> (第21図3・4, 図版第20図25~28) いずれも須恵器で, 3・図版第20図25は高台付杯である。内外面ともロクロナデ調整で, 底部は二次的にナデ調整が加えられている。図版第20図26は杯で, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 二次的にナデ調整が加えられている。28は壺の胴部で外面には平行叩目・内面には同心円叩目が施されている。

19 DP<sub>8</sub> (第21図5~12, 図版第20図29~36) 5~10は須恵器である。5~9は杯で体部は内外面ともにロクロナデ調整である。5~7には高台が付され, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 高台の接合面の周縁は内外面ともにナデられている。10・図版第20図35は蓋で天井が回転ヘラ削り, 体部はロクロナデ調整である。図版第20図35には中央部がわずかに突出するツマミが付されている。11・12は土師器の椀底部で, 11が椭Ab類, 12は椭A II b類に属し, 体部の立ち上りは底部近くでくびれてから内彎ぎみに立ち上っている。

20 BP<sub>13</sub> (図版第20図37) 須恵器の壺の口頭部で, 広く外反するものである。

20 BP<sub>16</sub> (図版第20図38・39) ともに須恵器で, 38は高台付杯の底部で, 底面は全体にナデ調整が加えられている。39は蓋のツマミで直径1.4cm, 高さ0.6cmを測る小形のものである。

20 BP<sub>23</sub> (図版第20図40) 須恵器の高台付杯で, 底部の切り離しは回転ヘラ切りである。高台を付した後に高台の周縁はナデ調整が二次的に加えられている。

20 CP<sub>1</sub> (第21図13~16, 図版第20図41~43) 13・14は須恵器の杯で内外面ともにロクロナデ調整で, 14には高台が付されている。底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 高台の周縁は二次的なナデ調整が施されている。15・16は土師器の椀で, 15は椭A II類で, 体部は内彎ぎみに立ち上り, 口縁部は外反している。16は黒色土器で, 底部を欠失している。椭B II類で高台が付くと思われる。

## V 遺構外出土の遺物

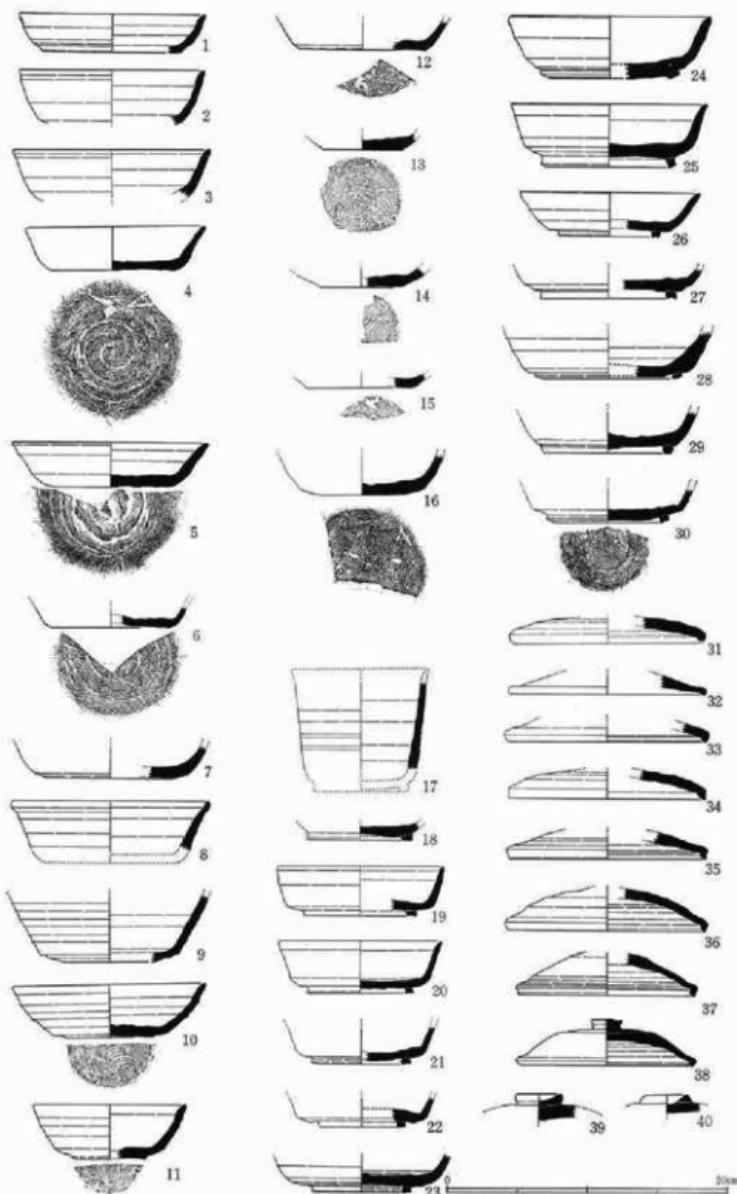
遺構外から出土した遺物は須恵器・土師器・中世陶器などの土器類のみで、土器類の大半は破片となって單発的に出土し、全体の器形を知ることの出来るものは極めて少ない。遺物の量は平箱で約6箱で、その主体は須恵器と土師器である。土器類の記述にあたっては時代別に大別し、器形で細分した。なお、器形の推定が困難な胴部片は一括してその断面は垂直にした。

### 1. 須恵器 (第22~24図、図版第16図1~2・23図~24図1~10)

須恵器の大半は口縁形態で示さなければならなかったように細片が多く、器形全体を推定し得るものはほとんどない。器形から杯・蓋・長頸壺・短頸壺・壺などに分けられ、胎土に砂粒を含み、灰黒色や灰白色を呈している。

杯 (第22図1~30、図版第16図1~2・23図1~14) 杯は高台のつかないものとつくものがあり、底部の切り離しからさらに細分される。1~16は高台のつかない一群である。1~7は底部の切り離しが回転ヘラ切のもので口径13~14cm内外を測り、内外面はロクロナデ調整である。体部の立上りは1~3のように内輪気味に立上るものと4~6のように外反気味に立上るもの、8のように口唇部が内側へまがるものもある。底面周縁はナデ調整が加えられているもの、6のように全体をナデたものもある。9~15は底部の切り離しが回転糸切りによるもので、口径11~13.5cmを測る。全体的に薄手で、内外面ともロクロナデ調整である。底面は平底で、体部の立ち上りは底部で一度くびれて内輪気味に立上っている。胎土は精選され、焼成も堅緻である。16は丸底を呈し、底面はヘラ削りされた後にナデ調整が加えられている。17~30は高台の付された一群である。17は器高のある杯で体部に幅0.2cmの沈線が2条施されている。灰黒色を呈し、焼成も堅緻である。おそらく、器形から他のものに比して若干年代的に下るものであろう。18~29は底部の切り離しは回転ヘラ切りで、口径12~14cm内外を測る。内外面はロクロナデ調整で、高台は外方へふんばるように付されたもの、体部底面に対しては、垂直に付されたものがある。底面は高台が付された後、高台内周縁はナデ調整が加えられている。27の高台外周縁の接合面上には沈線が一条引かれている。体部の立上りは腰から19~20のように直線的に立上るものと24~26のように外向してゆくものとがある。胎土は高台のつかない1~8に近似し、砂粒を多く含み、灰褐色・灰黒色・灰色を呈している。30は底部の切り離しが回転糸切りで、高台内周縁はナデ調整が加えられている。高台は外方へふんばるように付され、体部の腰は角張り、内輪気味に立上っている。体部調整はロクロナデで、胎土に砂粒が混入され灰褐色を呈している。

蓋 (第22図31~40、図版第23図15~18) 蓋は破片でしかうかえないので、口径13~15cmを測る。天井部の平坦面はヘラ削り調整で、肩から口辺に向う傾斜面はロクロナデ調整が施されているものが多い。38は天井部の平坦面に回転ヘラ切り痕を残し、その上にツマミが付されている。



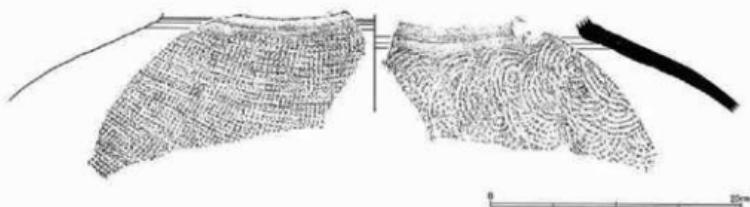
第22図 遺構外出土遺物（須恵器1）

口縁は外方に開くものと内傾するものがあり、38の口唇端部は内側に丸められている。つまみは宝珠形または亜流とでも称すべき一群のツマミで、33のようにや・偏平であるが、頂上部が平坦となり中央部だけがわずかに突出しているものと39・40のようにツマミ頂上部の凹面に突出部のないものとがある。40のツマミの立ち上りは天井部に対して内傾している。

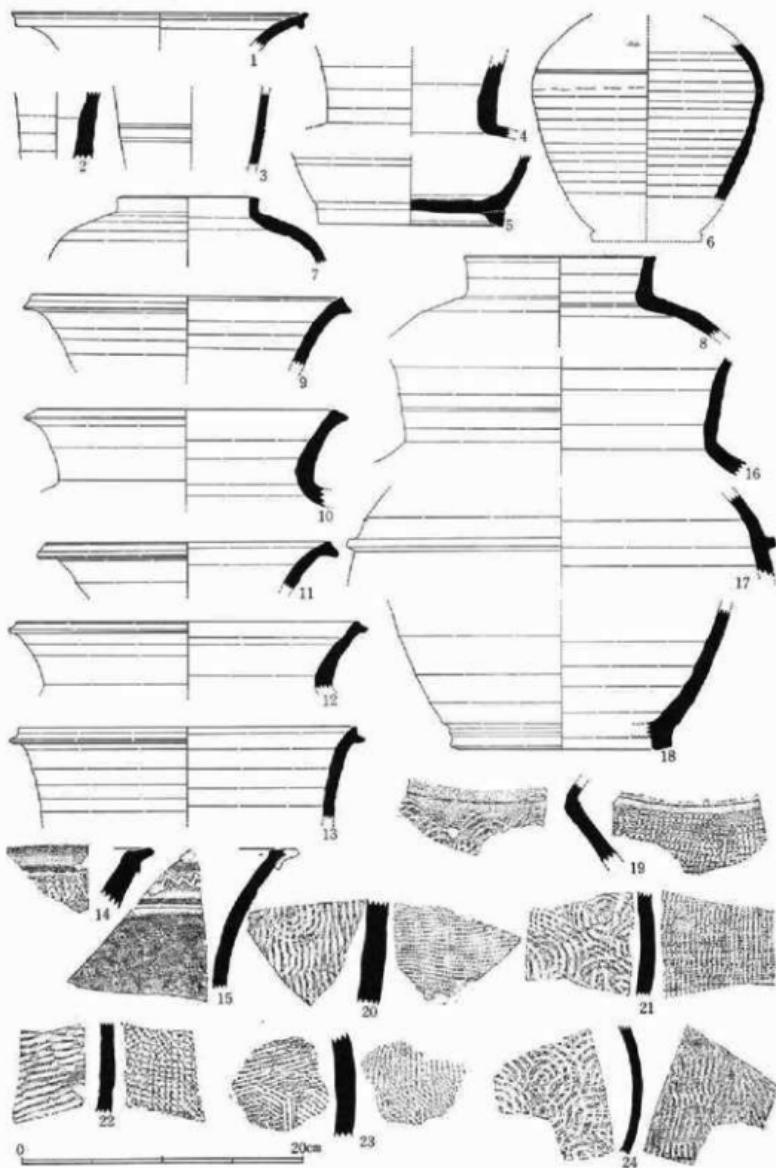
**長頸壺**（第24図1～6、図版第23図19～22） いずれも破片のため器形全体を推定することは困難であるが、1～4は口頸部で2のように細形のものと3・4のように太形のものとがある。いずれも内外面はロクロナデ調整で、3の口頸部には断面の丸い沈線が2条めぐっている。5・6は胴部片で、6は肩の張らないもので、肩上半が研磨、胴下半はロクロナデ調整で、胎土には小砂粒を含み暗赤灰色を呈している。図版第23図21は肩が「く」の字状に折れますが、外面には自然軸が湧出している。

**短頸壺**（第24図7、図版第23図23） 口頸10cmを測るもので、口縁は直立して口唇端部は角張って横ナデ調整されている。内外面ロクロナデ調整で、外面には自然軸が湧出している。

**甕**（第23図・24図8～24、図版第23図24～31・24図1～10） 器形の全体を知りうるものは検出されておらず、口径は大略25cm内外を測る。8は口頸部が直立するもので、口唇端部が若干凹んでいる。口頸部はロクロナデ調整、胴部の内外面には格子叩目が施されている。9～15は口頸部で、立ち上りはやや直線的に外反し、口唇端部は鋭く三角状を呈して外方に折り上げている。14・15には波状文、16には横走する沈線が1条引かれている。17は胴部に凸帯のもつもので内外面ともにロクロナデ調整で、叩目等はない。外面には自然軸が湧出している。胎土は精選され、白灰色を呈している。19～24は胴部で各種の叩目が施されている。外面は格子叩目が多く、内面は平行叩目・同心円叩目が多い。20は平行叩目と同心円叩目が施されたものである。第24図は大形の甕の頸部から肩にかけるもので外面には平行叩目、内面には同心円叩目が施されている。いずれも叩目は頸部直下から施された後、横ナデ調整され、磨消されている。内面の頸部下では頸部と体部を接合した接合痕が見られる。



第23図 遺構出土遺物（須恵器2）



第24図 遺構外出土遺物（須恵器 3）

## 2. 灰釉陶器 (第25図1~4、図版第16図)

13・18・19)

全体の形状は把握されないが4片出土している。1は口径17cmを測る椀で体部は内掛気味に立ち上がり、口唇部は玉縁状を呈している。体部はロクロナデ調整で、釉は口縁から下へ3.4cm位の所まで漬けがけされ、内面が淡緑色、外表面が黄灰色を呈し光沢がある。2

も口径16cmを測る椀で、口縁は内掛気味に立ち上がり口唇部は外向し玉縁状を呈している。外表面に釉薬は施され、灰黄色を呈している。3・4は底部で高台は3が外方へ4は内向するよう付されている。3は内面の一部に、4は内面及び外表面の高台接合面まで黄緑色の釉がかかっている。4点とも胎土は精選され、1~3が明灰色、4は暗灰色を呈している。3の底部の切り離しは回転糸切りと思われ、高台の接合面の内外周はナデ調整されている。

## 3. 土師器 (第26図1~29)

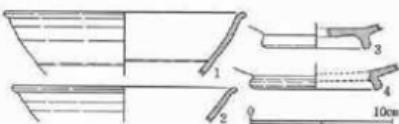
土師器は本遺跡出土土器量の約半分をしめる。大半が細片となっており、また器形がわかつても器面の磨滅が激しいために、調整不明のものが多く、今回は器形を中心に観察せざるおえなかった。器種から椀・壺・壺に分けられる。

椀 (第26図1~16) 椭を形状によって分類すると、A類：高台の付かないものとB類：貼り付けによる高台の付くものの2種がある。各々は、さらに口径の計測値によって、I類：13cm未満の小形のものとII類：13cm以上の大形のものにわけられる。A類の底部破片は多く出土しており、形状によって、a類：底部からくびれずに立ち上がるるものとb類：底部から一度くびれて立ちあがるものに分けられる。A類の底径は4~9cmの幅がある。底径のわかるA I類・A II類を比較した場合、「小さな口径のものは底径も小さい」とは一概に決められず、また全体を知り得る資料が少なすぎるため、今回は底径の大小による分類はさしひかえた。B類の高台は、高台の高さによって、a類：1cm未満のものとb類：1cm以上のものに分けられる。このB類に属するものの大半が黒色土器である。

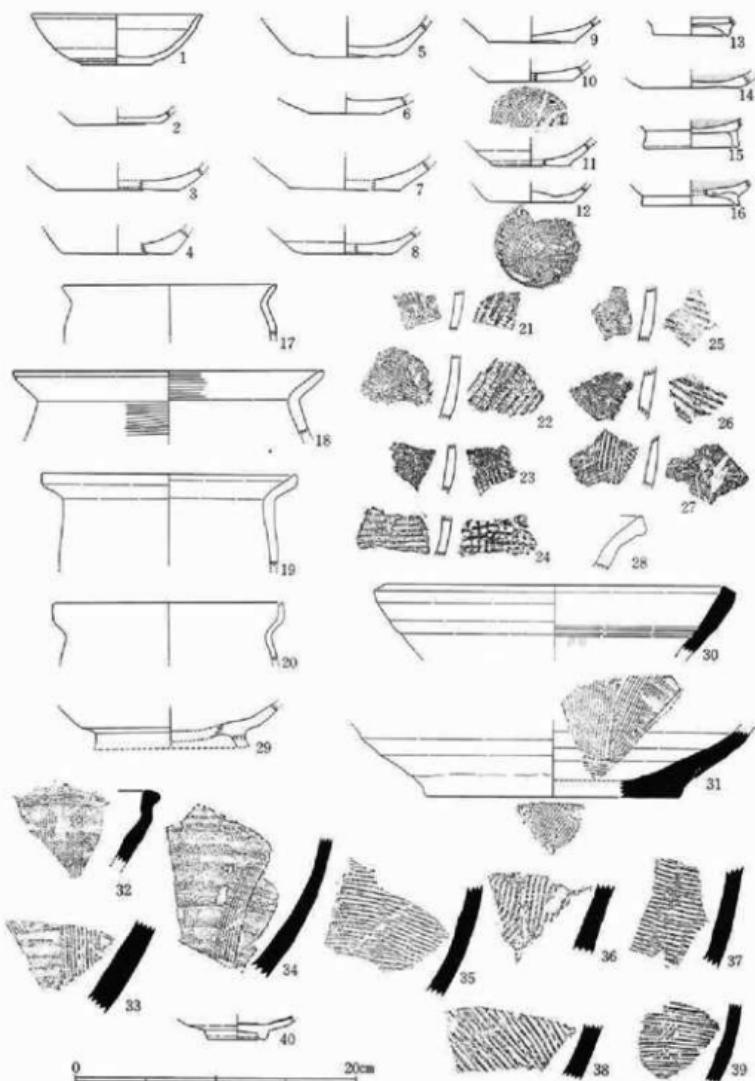
椀器面の磨滅が著しく、整形不明のものが多いが、わかるものは全て糸切り底で、内外面ともにロクロナデ調整である。ただし黒色土器は内面にヘラミガキを行なっている。胎土はきめ細かく、砂粒を含むものが大半であるが、黒色土器にはきめ荒く、砂利を含むものもある。色調は淡橙色あるいは橙色を呈する。以下に、遺構出土のものも含めて椀の分類を記す。

A I a類：口径13cm未満、底部からくびれずに立ち上がるものである。1号土壤・16B P 13 (第16図5、第20図22) で出土している。

A I b類：口径13cm未満、底部から一度くびれて立ち上がるものである。第26図1のほかに



第25図 遺構外出土遺物（灰釉陶器）



第26図 造構外出土遺物（土師器、中世陶器）

1号土壙（第16図4）で出土している。

A II類：口径13cm以上で底部付近の形状は不明のものである。19 CP<sub>2</sub>・20 CP<sub>1</sub>（第20図45・46、第21図15）で出土している。

A II a類：口径13cm以上、底部からくびれずに立ち上がるものである。19 CP<sub>2</sub>（第20図47）で黒色土器が出土している。

A II b類：口径13cm以上、底部から一度くびれて立ち上がるものである。18 HP<sub>1</sub>・19 DP<sub>8</sub>（第20図40、第21図12）で出土している。

A a類：口径は不明で、底部からくびれずに立ち上がるものである。第26図2～6・14（黒色土器）のほかに、C～E溝・18 HP<sub>4</sub>・19 CP<sub>7</sub>（第12図16・34、第13図7、第20図43・53）で出土している。

A b類：口径は不明で、底部から一度くびれて立ち上がるものである。第26図7～12のほかに、4号土壙・B・D溝・8 GP<sub>2</sub>・16 EP<sub>1</sub>・17 HP<sub>1</sub>・18 HP<sub>1</sub>・19 DP<sub>8</sub>（第16図16、第12図12・35、第19図11、第20図25・26・34・38・41・42、第21図11）で出土している。

B I a類：口径13cm未満で、高台の高さ1cm未満のものである。1号土壙・16 BP<sub>1</sub>（第16図6、第20図15）で出土し、ともに黒色土器である。

B I b類：口径13cm未満、高台の高さ1cm以上のもので、本遺跡からは出土していない。

B II類：口径13cm以上で、高台の高さが不明のものである。20 CP<sub>1</sub>（第21図16）は底部を欠失しているが、黒色土器であることから、本類に属すと思われる。

B II a類：口径13cm以上、高台の高さ1cm未満のもので、本遺跡からは出土していない。

B II b類：口径13cm以上、高台の高さ1cm以上のものである。17 HP<sub>1</sub>（第20図36）で黒色土器が出土している。

B a類：口径は不明で、高台の高さ1cm未満のものである。第26図13・16のほかに2号建物跡・D溝・16 BP<sub>13</sub>（第10図5・第12図36・第20図22）で出土し、14以外全て黒色土器である。

B b類：口径は不明で、高台の高さ1cm以上のものである。第26図15のほかに17 HP<sub>1</sub>（第20図35）で出土し、ともに黒色土器である。

甕（第26図17～27） 全体の器形を知り得るものは出土していない。口縁の形状によって、A～C類に分類された。

A類（17・18）：口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は丸いものである。17は口径約16cmで、器面の磨減が激しく整形は不明確であるが、ロクロ未使用の可能性が考えられる。胎土にはほかのものより砂粒・砂利を多く含む。18は口径24cmで、ロクロナデ調整の後、口縁部内面・胴部外面にはカキ目調整を施している。口縁部外面には煤が付着し、胎土はきめ細く、砂利を含み、焼成は堅緻である。

B類（19）：口縁部はA類と同様に外反するが、口縁端部はつまみあげによって面をもつも

のである。19は口径18cmで、刷部はほとんど張らずに長胴となる。内外面ともに磨滅が激しいが、ロクロナデ調整を施しているようである。胎土はきめ細かく、砂粒を含む。ほかに16 BP<sub>1</sub>(第20図16)で出土しているが、この壺の口縁端部はつまみあげられてはいない。

C類(20)：口縁部が内擣するものである。20は口径16cmで、口縁は肥厚している。内外面をロクロナデ調整している。口縁部内面には煤が付着し、胎土はきめ細かく、砂粒を含む。

21~27は胴部破片である。大半が、外面は叩き目、内面は横位のハケ目調整を施されている。叩き目には21~24の方形叩き目と25~26の条線状叩き目がある。ハケ目の間隔はものによって粗密がみられる。24は内外面叩き目のものである。ほとんどのものに煤の付着が認められる。これらは壺のほかに壠の胴部となる可能性も考えられる。

壠(第26図28) 壠と判明するものは極めて少ない。28の口縁部は外反し、口縁端部外面には面をもつ。器面の磨滅が激しく、調整は不明である。胎土には砂粒を含む。

第26図29は磨滅が激しく、形状が明確ではないが、鉢の底部かと思われる。

#### 4. 中世陶磁器 (第26図30~40、図版第24図24~32)

中世陶磁器は平箱1枚程出土した。珠洲系陶器と磁器に大別され、珠洲系陶器が大半を占む。

珠洲系陶器 器種としては鉢・壺の2種がある。大半が、色調は暗灰色・鼠黒色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は堅緻である。

鉢 器形全体を知り得るものは出土していない。口縁の形状により、A類、30のように口縁端面を平直にとるものとB類、32のように口縁基部を強く押え、端面を平らに外方へ引きだしたもの2種に分けられる。また、描目の単位を知り得るものはないが、大半が1束10~13本で16単位以上と思われる。底面は31のように静止糸切り底になっている。32~34は他と色調が異なり、灰茶色を呈する。34は1束8本の条線を粗く引いている。

壺 口縁部破片は極めて少なく、刷部破片が大部分を占む。35~39は胴部破片で、外面には3cmあたり9~10本の条線状叩目を施し、内面には押圧痕が認められる。

磁器 40は高台付きの皿で、内面には蛇の目を有する。外面及び内面中央の円・蛇の目の外周には淡緑色の釉を施している。高台は削り出しで、角がしっかりと角張っている。

ほかに、表土中、近代座芥壠より18~19世紀の陶磁器(第27図、図版第24図33~37)が出土している。



第27図 道標外出土遺物(近世陶磁器)

## 総括

### 1. 沖積地における遺跡について

新潟県における沖積地の遺跡のあり方については昭和の前半に種々の議論がなされ、代表的なものとして金塚友之丞・大木金平・齊藤秀平の「康平・寛治の古地図」をめぐる真偽論があつた。平野部周辺における遺跡の分布と標高から旧海岸線や旧湖岸線を推定する目的で低湿地帯の遺跡調査が進められた。この結果、海岸線は古地図の描かれた11世紀とは異なり、古地図は偽物であると考えられている(齊藤 1937)。しかし、その後も沖積部については「康平・寛治の古地図」の考え方から脱却できず考古学の調査対象として取扱われることは極めて少なかつた。沖積部の遺跡の存在は県教育委員会が昭和37年・48年に行なった全県的遺跡分布調査や昭和51年から実施している遺跡詳細分布調査、それに高速自動車道・新幹線・圃場整備事業などにより一層明確になった。さらに圃場整備や高速自動車道などの諸開発に伴い、これらの遺跡が発掘調査され遺跡の性格が把握されるようになってきた。更に遺跡が地質学的研究にも考慮されるようになり沖積地の形成と遺跡の立地が一層明確になってきている(新潟古跡丘グループ 1974)。

新潟県には新潟市を中心とする新潟平野、柏崎市を中心とする柏崎平野、上越市を中心とする高田平野がある。このうち遺跡分布調査が比較的進んでいる新潟平野と高田平野に所在している遺跡の分布・立地について若干の問題点を指摘しておきたい。高田平野を流れる諸河川の多くは扇状地を形成しながら関川に合流し、直接日本海へ注ぐものはない。これらの諸河川に沿って自然堤防が形成されており、同一自然堤防上に奈良～室町時代の遺跡と現在の集落が立地している。一方、沖積平野が広く発達している新潟平野北西部の西蒲原郡内における遺跡の分布状況は高田平野の様相と異にしている。この地域は信濃川・中ノ口川・西川の3河川が北流し、他の小河川はこの3河川に合流している。この地域においても自然堤防を認めることができるが、地域によって奈良～室町時代の遺跡の分布は異なっている。弥彦・角田山麓から中ノ口川までの間を見ると燕市・吉田町南部周辺では現集落が営まれている自然堤防上に分布しているのに対し、黒埼町から西川・味方・潟東・中ノ口の各町村にかけては現集落が営まれている自然堤防とは関係のない旧自然堤防上に立地している。これらの遺跡は南北方向に飛石状に2列から3列認められる。また、旧潟湖を取囲むように遺跡が分布している地域もあり、この典型的なものは巻町の旧鍬湯周辺に見られる。このように両平野における遺跡は基本的に自然堤防や湖岸堤防上に立地しているが、現地形における遺跡の位置に差異がある。これは、それぞれの平野の持つ地質構造上の性質と平野を流れる河川の土砂運搬量・氾濫回数・湿地の利用度などに帰因するものと思われる。

沖積地における遺跡の発掘調査は圃場整備事業や高速道路などの工事に伴い、県内各地で行われている。高速自動車道などの調査では区域が限定されているために遺跡の全体像を把握し得がないが、各々の遺跡の性格付がなされている。今まで発掘された沖積地の遺跡の状況を見てみると、その結果からA) 遺構に伴って遺物が検出されるもの、B) 遺構の存在は確認されていないが、明確な包含層が指摘でき、遺物も原位置を保っているもの、C) 遺物が散布または包含しているが、包含状況に規則性がなく積極的に生活痕跡を指摘できないもの、D) 遺物が散布しているが、遺構の基底部の一部が部分的に残るものに大別される。A・Bタイプは積局的に遺跡と認められるが、Cタイプは付近に中心となる遺跡があり、その遺跡の縁辺部にあたっていると理解されている。反面、付近に中心に中心となるべき遺跡がない場合は自然の力もしくは人為的な行為によって遺跡が破壊・攪乱され遺物が移動したことを考慮に入れなければならないであろう。Dタイプは人為的な行為によって遺物包含層まで根こそぎ破壊されているもの、遺構のあり方からAタイプに属するものもある。

今後、沖積地における遺跡については分布調査を徹底的に行うことは勿論、早期の段階で面的な試掘をし、事実確認をする必要がある。遺跡を素材として遺跡自体の詳細な吟味の上に立脚して、古い絵図や更正図それに圃場整備に伴う工事計画図などを駆使し、微地形・旧河道などを復元し、時代別の古地形を把握する必要がある。また、調査に際しては理科学的調査のデーターにもとづいて古環境を復元することも必要になろう。

いま、頸城地方の高田平野周辺の遺跡の分布を見てみると(第2図)と8つの遺跡集中地域が認められ、A地域：保倉川旧河道沿い付近の自然堤防(頸城村西溝・百門町一下中島)に20ヶ所、B地域：飯田川中流域の広大な自然堤防(上越市重川新田・三和村沖津・広井・岡本・下中島)に23ヶ所、C地域：宮野遺跡周辺の自然堤防(上越市福田一荒屋・三田新田～中新田・富岡一大日)に33ヶ所、D地域：飯田川上流の扇状地付近(三和村水科・法花寺・中野・上田)に8ヶ所、E地域：櫛池川上流の扇状地・洪積段丘上(酒里村岡野町・菅原・塙曾根)に7ヶ所、F地域：関川上流の扇状地(板倉町田井・開根)に7ヶ所、G地域：矢代川上流の扇状地(新井市上百々・栗原・十日町)に7ヶ所、H地域：関川と櫛池川の合流点付近の自然堤防(上越市子安・下新町・今池・本長者原)に6ヶ所となる。発掘調査が実施された遺跡数は少ないが、G地域は国賀を中心とした国府・国分寺推定地で、栗原遺跡はその成果から(新潟県教委1980・1981・1982)重要な機能をになっていた遺跡と判断される。また、H地域の下新町遺跡・今池遺跡は長者原周辺国府推定地(新井市史編修委員会 1973)に隣接しており、現段階では有機的関連を持っていい遺跡と考えられる。このように頸城地方の沖積地には数多くの遺跡が分布し、その集中地域や遺跡の性格が序々に明らかになりつつある。おそらく、性格の異なる遺跡が複雑に組み合って一地域を構成するものと思われる。

頸城郡内の郷所在社やその範囲については先学によって種々論ぜられているが、今まで定説

(第2)

(第3)

というものはない。中世や近世の史料、慶長3年越後国頭城郡絵図、地理的環境を参考にして、頭城郡内の郷所在推定図が作成されている（新潟県教委1980）ので、この郷境推定線と現段階で認定されている奈良・平安時代の遺跡の分布を照合してみると、A地域は夷守郷・D地域は五公郷・E地域は物部郷・F地域は板倉郷・G地域は栗原郷となり、各推定郷域内に完全に含まれている。しかし、B地域には夷守郷・津有郷・五公郷、C地域は夷守郷・津有郷、H地域は高津郷・物部郷にかかっているもの、若干のずれをもっては各郷域におさまる傾向がある。調査対象となった宮野遺跡はC地域に属し、夷守郷と津有郷には入るもの、帰属する郷は2者のうちのいずれかであろう。

頭城地方の開発については中央勢力である大和西大寺と東大寺が関与し、奈良時代後期には西大寺領桜井荘と津村荘が、平安時代中期には東大寺領石井荘・吉田荘・真沼荘が存在していたことが文献からうかがわれる。しかし、位置の比定については平野団三（平野1968・1969）・大場厚順・花ヶ前盛明（大場・花ヶ前1976）らによって種々論ぜられているが、その位置についてはまだ明確になっていないので、荘園名を列挙するのみで止めておきたい。今後の課題として、沖積地における個々の遺跡についての考古学的資料の蓄積と詳細な検討によって、遺跡相互の相関関係を追求する必要があろう。

- (註1) 明和10年に雑誌「高志路」第1巻5・7-8-9・11-12号で金原友之丞・大木金平の両氏で  
康平・寛治図について論議があり、当時の県内の学会をにぎわした。
- (註2) 半径1km以内に5ヶ所以上の遺跡が確認された地域を集中地域と呼称することにした。また、  
半径1km以内を基本として2km・3kmまでの集中度を確認して地域の設定を行った。A～C地  
域は半径3km以内で、D～H地域は1km以内で集中している。
- (註3) 栗原遺跡は昭和53年に新井市教育委員会によって発掘された。54年から県教育委員会は7ヶ年  
継続事業として市教育委員会と共に発掘調査を実施し、調査概報が公にされている。下新町  
遺跡・今池遺跡は昭和55年から県教育委員会によって発掘調査され、下新町遺跡は調査が完了  
しているが、今池遺跡は58年度に調査が完了した。
- (註4) 西大寺資材流記帳五「一巻 頭城郡大領 高志貴船 長田園 景雲三年」、「一巻頭城郡桜井庄  
印在国印」、「一巻 同地津村庄 印在国印」  
建久五年五月十九日 西大寺文書 「越後國 桜井庄三千百五十七町九段二百六十四歩在流記」  
天暦四年 東大寺封戸莊園査定用帳 「越後國田百十三町二百八十九歩 頭城郡石井庄田六十  
五町一段七十四歩 吉田庄田廿町九段九十八歩 真沼田庄廿六町百六十歩」  
大治五年 東大寺路莊文書査定用等目録 「一越後國石井庄字吉田 一結 庄解等十一通 一  
卷条里坪付等 四枚 天平勝宝五年四月九日 庄解状一通……略」

## 2. 遺物について

今回の調査で検出された遺物のうち、主体を占めるものは須恵器・土師器・中世陶磁器の土器類である。これらの遺物は大略平安時代と室町時代に大別され、前者には灰釉陶器・石製荷輪が、後者には青磁が併出している。出土量については中世陶磁器よりも土師器・須恵器が多く、約70パーセントを占めている。土師器と須恵器の比率については出土遺物量からいえば約半々ずつであり、わずかに土師器が多くを占めている。詳細なデーター分析はしていないため、今後の研究に委ねたい。また、遺物自体の出土状況に安定性がなく、周一個体がまとまって出土する例は極めて稀で、個々の破片が単発的に出土している。このため遺物自体に制限があるため、セットとしては問題を有するので、細分をせずに記述することとする。

須恵器 器種構成からは杯・蓋・長頭壺・甕・皿・横瓶などがある。県内においては、從来奈良・平安時代の土器として一括されてきた傾向が強く、県内で今日まで調査された集落跡および窯跡出土器と原則的には共通性が見られる。しかし、本遺跡で注目されるのは杯の底部切り離し技法で、回転糸切り痕をもつものが存在することである。今日までは回転糸切り痕を有する杯の出土例の報告は皆無に等しいことから、回転糸切り痕を有す杯の存在は、ヘラ切り痕のみの杯を出土する遺跡とはある程度地域差もしくは時間差があるものと思われる。しかし、現状では資料不足のため明確ではなく、今後の研究に期待したい。本遺跡出土の須恵器の杯・蓋・甕について二・三気質いた点を列挙すれば、杯については、底部の切り離し技法から回転糸切りとヘラ切りの二者があり、さらに高台を付したものと付さないものとがある。両者の比率はヘラ切りで高台が付されたものが圧倒的に多い。回転糸切り痕を有すものには高台を付したものより高台のないものが多い傾向にある。蓋については宝珠が全体的に扁平となり、中央部が若干凹んでいるものが多く、時代的に新しい要素を具備している。貯蔵用の甕には大型のもので口頭部に横波状文を施したものもある。印目も外面が平行印目、内部が同心円印目という組み合せのほかに、内面に平行印目や格子印目、それに花卉状印目などを施したものもある。以上あげた諸点は一・二点を除き状況証拠あるいは消極的根拠ではあるが、いずれも9世紀後半から10世紀中頃にかける年代を示すものであり、灰陶陶器、土師器の黒色土器がその裏付けをさらに補強するものであろう。

灰釉陶器は器形から壺・皿・段皿がある。いずれも美濃・光ヶ丘1号窯式(齊藤1981)のものが主体を占めている。中には灰釉の施釉が漬け掛けになるもの、段皿の段も浅い沈線を引くことによって形を保っているものなどがあり、光ヶ丘1号窯式よりも新しい要素を含んだものもある。

土師器 本遺跡で出土した土師器には甕・壺・碗の3器種がみられる。これらは、県内では半ノ木遺跡(新潟県教委1973)・茶院遺跡(新潟県教委1976)・長表遺跡(六日町教委1975)・内町

遺跡（新潟県教委1974）・蛇山遺跡（新潟県教委1977）・岩野原遺跡（長岡市教委1981）で類例がみられる。

壺・壠の類は検出個体数が少ない。壺は口縁部の形状よりA～C類に分けられ、そのうちB類は、半ノ木遺跡・茶院遺跡5類・内町遺跡・蛇山遺跡、県外では石川県三浦遺跡中層（石川県教委他1967）に類例がみられる。壠では、口縁端部外面に面をもつもの（第26図26）は半ノ木遺跡・茶院遺跡に類似のものがあるが、17GP<sub>1</sub>出土（第16図15）の口縁部にかすかな段をもち、肥厚するものは、県内に類例がみられない。

壺は本遺跡出土の土師器中個体数がもっとも多い。A類（無台）は県内では半ノ木遺跡1・2類・長表遺跡Ⅲ類・岩野原遺跡など、県外では富山県じょうべのま遺跡A類（富山県教委1974）、石川県三浦遺跡上層A類に類例がみられる。B類（台付）は県内ではあまり確認されておらず、岩野原遺跡・長表遺跡・尾野内遺跡（昭和56年度県教委調査）に少数みられるのみで、県外ではじょうべのま遺跡B類・三浦遺跡上層B類でみられる。本遺跡では壺の完形が少なく、壺総量でA類・B類の占める比率を明確には算出できないが、ほぼ三浦遺跡と同様に7～8割をA類が占める傾向がうかがえる。またA・B類と黒色土器の関係もじょうべのま遺跡・三浦遺跡と同様の傾向がみられ、A類には黒色土器が少なく、B類の大半は黒色土器である。

本遺跡の出土状況からは、共伴関係を知りえる資料は少なく、16BP<sub>1</sub>で壺B類と壺Bla類の判出、16DP<sub>1</sub>で壺AI a・b類とBla類の併出を知りえたにとどまり、生活容器のセットを知ることはできなかった。また本遺跡出土の土師器は、壺に台付・内面黒色処理の黒色土器が存在すること、壠の存在、他遺跡との比較により9～10世紀と考えられる。今回の調査で、県内ではじめて台付壺の資料がある程度まとまって得られたことは、今後の当該期の研究にあたって大きな成果であった。これから資料の増加による研究の進展を待ちたい。

中世陶磁器 珠洲系陶器は壺・鉢の2器種が確認された。壺は、ほとんどが胴部破片で、口縁部の形状を知り得るものはE溝出土の第13図9のみである。9は比較的短い口縁部が「く」の字状にくびれ、口縁端部に面をもち、角縁となるもので、珠洲法住寺第3号窯（石川県教委他1977）（以下、法住寺と略す）・壺II C類に類似する。鉢A類は法住寺II B類に、B類は法住寺II A類に類似する。また、描目は「米」の字状より多く引いたと考えられるものが大半を占める。以上のことから、本遺跡の珠洲系陶器は、珠洲陶編年（石川県教委他1977）のⅢ・Ⅳ期に属し、14世紀のものと考えられる。

磁器としてはA溝と造構外から各1片出土しており、ともに舶載のものである。A溝出土の磁器（第12図8）は外面に連弁文をもつ龍泉窯系青磁と考えられる碗で、14世紀頃のものであろう。

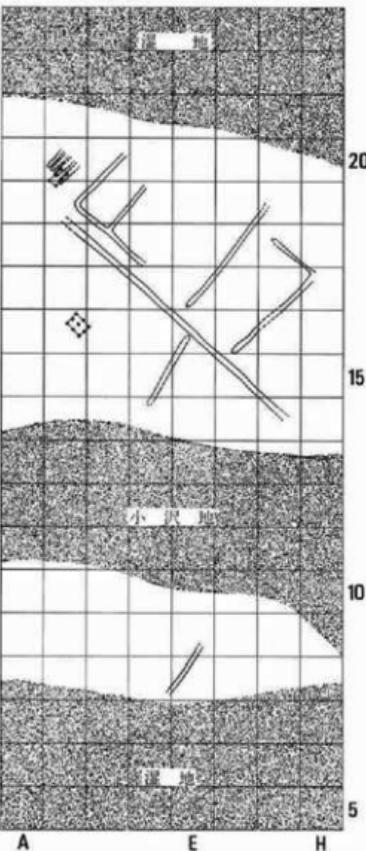
### 3. 結 語

新潟県の沖積地は早くから開拓され、今日まで長期間にわたって農業基盤整備などによって

地形の形状変更が行われ、数多くの遺跡を破壊・埋滅させてきた反面、遺跡がよく発見されるようになってきた。この結果、栄町の長畠遺跡（縄文）・半ノ木遺跡（古代）・豊浦町の曾根遺跡（古墳・古代）・柏崎市の下谷地遺跡（弥生）などに保存状況のよい遺跡の存在が明らかになり、沖積地における遺跡が注目されるようになってきた。沖積地の遺跡の大半は古代から中世にかけてのもので、縄文時代から古墳時代までのものは極めて少ないので現状である。遺物の出土状況も二ないしは三時代のものが混在して出土し、同一個体がまとまって出土する事は稀で、個々の破片が単発的に出土する傾向が強い。これは数度にわたる耕作整理などで土砂が移動された結果に由来するものであろう。今後の課題として、より古い時代の遺跡がまだ沖積地に埋もれている可能性が多分にあり、考古学的に追求しなければならないであろう。

本遺跡は道路法線発表後に市教育委員会の分布調査により新たに発見されたもので、高田面上の自然堤防に遺跡が立地している。

発掘調査により平安時代（9～10世紀）と室町時代（14世紀）の集落の一部と推定されるものの、遺物包含層がほとんどなく遺構の基底部の一部しか残存しておらず、沖積地における遺跡のあり方を如実に示している。しかし、遺物の散布範囲には差異があり生活領域が異なっていたものと思われる。本遺跡の範囲は、調査対象地が遺跡全体からみればほんの一部にすぎず、全体像を把握することは容易ではない。現集落がのっている自然堤防がほぼ南北にのびていることから北限は三ツ橋一福田へと続くものであろう。南限は大野一東小猿屋へと続くものであろう。東限・西限は自然堤防が序々に高度をおとして造構・遺物もほとんど採集されず湿地帯になっている。なお、西限は一部小沢地を狭んで急激に落ち



第28図 遺跡模式図

込んでいる（第28図）。本遺跡の周辺や隣接地には古代の遺物が散布しているため、本遺跡がこれらの遺跡と一連のものかもしれないが、遺構・遺物の集中度から今回調査を実施した範囲は遺跡の東限と考えられる。

遺構としては建物跡・溝跡・ピット・土壌などこれらに伴うと考えられる土師器・須恵器などの生活用器と灰釉陶器・石製誇帶などが出土した。遺構は自然堤防の東側緩斜面に集中し、溝の周辺に数多く認められる。掘立建物跡は3軒検出され、その内一軒は柱痕が明瞭に残り、使用した柱の直径が判明した。また、布掘りの建物跡は県内で2例目で注目される。ピットはまとまりがなく、建物跡としては問題を残すが、底面には石・磚板などは認められず性格付を明確にすることはできなかった。転用窓や土師器の模様が出土した1号土壌は形態や深さから井戸跡と考えられる。溝跡は南北に走るD溝を中心にそれと直交するように東西に走る溝がある。D溝に直接連結するものではなく、いずれもある程度の間隔を有している。その間隔はB溝とC溝が7.5m、C溝とE溝が26.5m、E溝とG溝が15mを測り、「コの字形」に区画されている。この「コの字形」の区画は何を意味するのか明確ではないが、溝に囲まれた地域にピットが集中していることから建物跡を区画した溝とも考えられる。D溝は自然堤防を横断していることから用排水路的な性格を有し、条里に関係する溝とも考えられる。また、H溝は東側の小沢地から湿地帯へ水を流す溝と考えられる。なお、D溝では古代と中世の遺物が混在して出土していることからその時代は中世と考えられる。D溝の主軸方向は昭和18年の土地更正図の土地区画方向に一致し、中世以来土地区画の方向は変化していないと考えられ、今後の研究課題としたい。

調査対象予定地となった道路敷は遺跡全体から見ればほんの一部でしか過ぎず、全体像を把握することは容易ではない。遺構・遺物の出土状況から遺跡の東端部にあたるものと思われる。出土遺物、特に石製誇帶・灰釉陶器などの遺物から一般庶民の集落跡とは考えられず、在地有力支配層に関係した集落と考えることが妥当であろう。本遺跡が所在している上越市をとりまく歴史的景観を考えてみると、古代にあっては東大寺領や西大寺領の荘園があったことが文献的に裏付けられるが、その位置については定でない現在、本遺跡がどの荘園に属すかは定でない。いずれにせよ、本遺跡は荘園に関係する遺跡の一つとして把握されるものと考えられる。今後、石製誇帶・転用窓などの出土から地方における識字階層の普及過程や条里の追求が重要になってくるものと思われる。また、沖積地における遺跡の研究は遺跡形成時の自然環境を復元することに主眼を置かなければならぬが、考古学的追求からのみでは解決することはできず、理科学的方法を駆使する地質学的分野の協力を得なければならない。さらに古代・中世の遺跡の場合は文献史学の分野の協力によって個々の遺跡の性格などが一層明らかにされるであろう。

## 参考文獻

- 新井市市史編修委員会 1973 「新井市史」上
- 石川県教育委員会 1967 「加賀三浦遺跡の研究」
- 石川県教育委員会・珠洲古窯跡発掘調査委員会 1977 「珠洲法住寺第3号窯」
- 大場厚順・花ヶ崎盛明 1976 「中領城都・西領城都の莊・保」(かみくいむし 第23号 かみくいむしの会)
- 齊藤孝正 1981 「尾北庄における灰釉陶器の変遷」『桃花台ニュータウン遺跡調査報告書』
- 齊藤秀平 1937 「越佐古代地図」『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第7輯
- 高田市文化財調査委員会 1969 「向横窯跡」(高田市文化財調査報告書11集)
- 高田平野団体研究グループ 1980 「高田平野の第四系と形成史」(新潟大学教育学部高田分校研究紀要 第25号)
- 多賀有志 1972 「新潟県の条里遺制」(頸城文化 31 上越郷土研究会)
- 千葉県教育委員会・財團法人千葉県文化財センター 1980 「千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書」
- 富山県教育委員会 1974 「井波町高瀬遺跡 入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書」(富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ)
- 長岡市教育委員会 1981 「埋蔵文化財調査報告書岩野原遺跡」
- 新潟県教育委員会 1973 「南蒲原郡榮村半ノ木遺跡発掘調査報告」「北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」(埋蔵文化財緊急調査報告書第1)
- ※ 1974 「内町遺跡調査報告」「北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第3)
- ※ 1976 「茶院遺跡」「北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第5)
- ※ 1976 「鮎山遺跡調査報告」「北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第6)
- ※ 1980 「栗原遺跡第2次調査概報」
- ※ 1981 「栗原遺跡第3次調査概報」
- ※ 1982 「栗原遺跡第4次・第5次調査概報」
- 新潟古砂丘グループ 1974 「新潟砂丘と人類遺跡—新潟砂丘の形成史I—」(第四紀研究 第13卷第2号 第四紀研究学会)
- 平野團三 1968 「上越後莊園の研究」(越佐研究 第26集 新潟県人文研究会)
- ※ 1969 「越後國分二寺址論考」(越佐研究 第28集 新潟県人文研究会)
- 牧村教育委員会 1976 「宮口古墳群」
- 六日町教育委員会 1975 「長表遺跡」(六日町文化財調査報告書第2輯)

表1 ピット計測値一覧(単位cm)

ピット番号	長	緯	規	深	度	備	考	ピット番号	長	緯	規	深	度	備	考
(8G)	456							6	108	80	21				
1	456	170		13		古1・中1		7	180	104	31				
2	496(現)	280		26		古25		8	276	114	35				
3	68(推)	55		16				9	58	46	8				
(14B)								10	306	44	15				
1	52	30		17				11	310	94	21				
2	34	24		27				12	196	46	46				
3	45	40		43				13	36	35	6				
4	62	41		36				14	118	24(現)	16				
5	88	66		23				15	108	28	9				
6	60	51		22				16	202(現)	48	7				
7	42	42		10				(15C)							
8	80	65		24				1	38	32	15				
9	80	77		38				2	38	32	21				
10	90(推)	90		36				3	38	30	41				
11	148	32(現)		16				4	38	30	15				
12	18	18		5				5	56	54	33				
13	21	18		8				6	48	46	22				
14	28	24		7				7	58	42	14				
15	30	29		6				8	60	39	15				
16	42	36		8				9	34	19	21				
17	35	32		12				10	39	29	23				
18	42(推)	41		8				11	183	81	22				
19	36	35		9				12	17	16	28				
20	39	16		15				13	113	102	81				
21	38	24		20				14	36	35	12				
22	23	22		23				15	45	42	14				
23	27	26		24				16	29	29	7				
24	128	50		9				17	92	78	31				
25	88	30		17				18	29	28	12				
26	46	30		13				19	59	46	12				
27	36	34		27				20	30	29	16				
28	50(推)	38		8				21	35	34	17				
29	408	38		22				(15D)							
(14E)								1	50	41	18				
1	140	120		7		古4・中1・近2		2	34	34	19				
2	90	74		26				3	39	38	14				
3	63	48		48				4	34	28	21				
4	88	68		40				5	106	38	16				
(15B)						古3・近3		6	52	42(推)	8				
1	130	100		20		古1・近2		7	26	18	7				
2	118	80		20		古1		8	20	19	11				
3	180	158		31				9	24	22	16				
4	38	34		32				10	24	23	17				
5	96	90(推)		46				11	19	19	14				

ピット番号	長	幅	短	径	深度	備	考	ピット番号	長	幅	短	径	深度	備	考
12	43	39			21			10	26	25			9		
13	40	25			12			11	46	29			15		
14	23	21			14			12	63	48			30		
15	48	39			25			13	40	29			11		
16	480	88			20			14	106	65			43		
17	340	70			19			15	56	55			29		
18	500	64			35			16	42	40			11		
19	50	40			10	古2・鉄1		17	138	100			50		
20	500	70			20			18	64	38			19		
(15E)								19	42	31			20		
1	583	15			40	近1		20	98	68			6		
2	82	52			26			21	28	21			—		
(15G)								22	35	35			8		
1	181	132			33			23	34	34			24		
2	58	52(推)			19			24	112	58			21		
(16B)								(16D)							
1	112	98			18	古1		1	206	156			117	古12, 井戸	
2	38	34			38	1号建		2	—	90			—	古2・近1(新)	
3	38	36			64	古10・近1, 1号建		3	334	58			12	古2・近1	
4	52(推)	42(推)			42			(16E)							
5	28	22			17	1号建		1	234	178			39	古12・中1	
6	48	44			40	1号建		2	180	160			56	古6	
7	40	38			21			3	50	48			20		
8	40	39			45	1号建		4	88	84			26	古7	
9	46	38			29	1号建		5	104	92(推)			37		
10	60	48			59	1号建		6	270	131			48		
11	52	32			56	1号建		(16F)							
12	32	28			6			1	320	316			65	古15・中3・近16	
13	64	58			48	古8		2	54	50			36	古4	
14	212	98			10			3	46	44			20		
15	64	36			4			4	158	118			35	古7	
16	52	38			16			5	174(現)	128			29	古16・中2	
17	45	41			6			6	68	64			43	古2	
18	40	36			8			7	98	66			30	古10	
19	34	34			8			8	76(現)	74			13		
20	33	32			9			9	90(現)	68			—		
(16C)								(17B)							
1	36	34			25	近1		1	32	30			24		
2	360	56			17			2	48	34			32		
3	70	62			20	古2		3	42	40			41		
4	45	36			—			4	52	35			30	刀1	
5	30	29			8			5	160	120			48	古5・刀1	
6	42	37			8			6	44	32			39		
7	36	29			22			7	52	22			45	古4	
8	58	54			18			8	198	142			38		
9	134	37			20			9	90	36			9		

ピット番号	長径	短径	深度	備考	ピット番号	長径	短径	深度	備考
10	44	34	26	柱	2	71	51	21	
11	32	28	17		3	74	36	21	
12	27	26	8	柱底	4	342	64	13	
13	52	44	18		5	90	70	16	
(17C)					6	95	32	37	
1	150	122	18	古2	7	42	35	28	
2	80	64	132	古2	8	88	60	42	
3	34	32	24		9	37	22	26	
4	42	32	—		(18D)				
5	34	29	13		1	70	29	33	
6	103	34	15		2	260	54	25	古2
(17F)					3	384	150	35	
1	202	90	15	古21	4	74	38	21	
2	44	36	35	古2	5	48	38	37	
3	74(現)	50	18		(18F)				
4	138	56	13	古13	1	68	42	27	古32・中1
5	36	24	17	古4	2	24	23	26	古3
6	52	42	30		3	104	54	11	
7	72	54	7		4	82	46	36	古8
8	21	19	14	古4	5	64	30	35	
9	54	52	21		6	78	30	10	
10	68	58	13		7	200	164	72	古3・中3
11	54	46	29	古11	8	88	62	14	古7
12	60	40	37	古4	9	64	34	16	
13	132	122	13		10	34	29	28	
14	181	136	17	中1	11	362	106	47	
15	34	34	11		12	398	102	14	
16	52	48	23	古3	13	216	124	21	
17	38	34	28	古1	14	14	13	—	
18	32	28	11		15	56	41	8	
19	40	30	26		16	62	36	20	
20	32	31	25		17	124	100	20	
21	34	20	26		(18H)				
22	52	51	26	古1	1	192	74	12	古25
23	190	114	18	古32・中1	2	70	48	7	
24	72(現)	30	8	古3	3	94	74	27	古3
25	26	21	11	近1	4	68	64	34	古4
26	20	19	11		5	110	70	—	
(17G)					(19B)	36			
1	80	68	98	古25・中1	1	36	34	35	3号建
2	58	56	32	古5	2	29	28	30	
3	82	46	17		3	74	27	11	
(17H)					4	44	32	10	
1	142	88(推)	46	古35	5	66	59	23	
(18C)					6	36	34	14	
1	32		46		7	68	66	25	古2

ピット番号	長 径	短 径	深度	備 考	ピット番号	長 径	短 径	深度	備 考
8	61	40	21		3	76	64	30	古1
9	136	48	17		4	74	54	10	
10	102	46	70		5	56	44	26	
11	92	76	41		6	340	55	15	
12	122	76	24	古3・中1・石臼1	7	124(推)	86	—	古12
13	48	48	7	古15	8	410	370	33	古45
14	432(推)	75	36		9	36(現)	14	19	古1・鉄1
15	38	36	9		10	76	36	37	
16	74(推)	71	23		11	80(推)	64	14	
17	86	74	24		(20B)				
18	194	76	45	古5・中1	1	62	44	23	古8
19	330	194	12		2	94	54	6	古2
20	36	34	32	3号建	3	欠			
21	156	62	24		4	33	30	6	
22	93	86	20		5	93	76	67	古20・トイゴ
(19C)					6	欠			
1	欠				7	79	72	18	古1
2	欠			古25・中2	8	92	86	85	
3	欠			古3	9	45	40	11	古3・中1・近1
4	欠				10	86	66	17	
5	欠			古20	11	54	48	49	
6	66	65	31	古2	12	72	62	65	
7	126	100	36	古17・中1	13	520(現)	86	10	古1・近1・2号建
8	56	46	12		14	398(〃)	96	10	古6・2号建
9	94	84	4		15	454(〃)	110	14	2号建
10	105	43	13		16	424(〃)	90	22	古15・2号建
11	欠			古10・中1	17	49	36	25	古1
12	106	80	31	古7	18	47	38	13	
13	60	46	30		19	27	26	31	
14	42	37	46		20	46	40	11	
15	43	38	2		21	欠			木片
16	26	25	23		22	欠			
17	94	84	27		23	70	66	78	古1・木
18	90	78	26		24	80(推)	76	11	
19	98	48(推)	13		25	44	33	21	
20	59	46	26		26	78	41	27	3号建
21	不明				27	52	34	35	3号建
22	不明				28	40	38	32	3号建
23	不明				29	44	32	44	
(19D)				古3	30	194	89	11	
1	62	57	26	古7	31	110	106	24	
2	74	69	22		32	22	22	—	

注1. 近現代の落ち込みと判明するものには、備考欄に新と記す。

2. 備考の古・中・近は古代・中世・近世をあらわし、数字は土器破片数である。

図版第1図



遺跡遠景(南西から)



遺跡遠景(北東から)

図版第2図



18~20 B・C・D (北東から)



14~17 B・C・D (西から)

図版第3図



13~18 E・F・G (南西から)



13~18 E・F・G (北東から)

図版第4図



17~19 E・F・G (南東から)



17~19 E・F・G (東から)

図版第5図



18・19G (北から)



12～19G (北東から)

図版第6図



18・19G（南から）



21～25B（北東から）



1号建物跡（北西から）

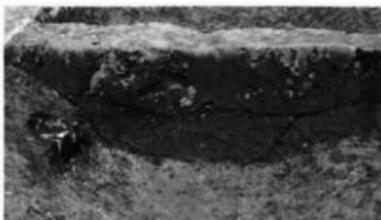


2号建物跡・3号建物跡（西から）

図版第8図



A溝（北から）



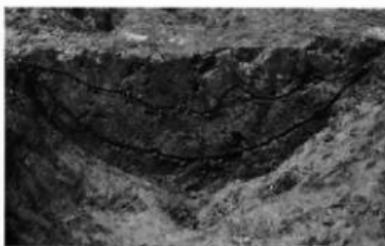
A溝断面



C溝（西から）



B溝（東から）

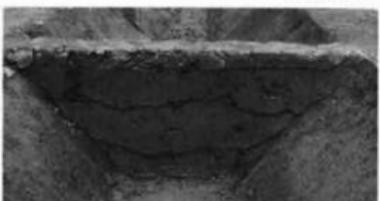


C溝断面

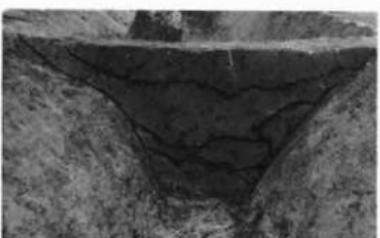
図版第9図



D溝（北から）



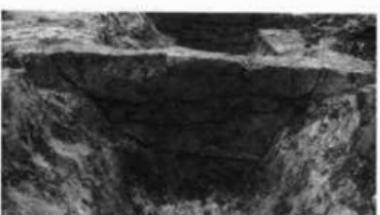
D溝断面



D溝断面



E溝（東から）



D溝断面

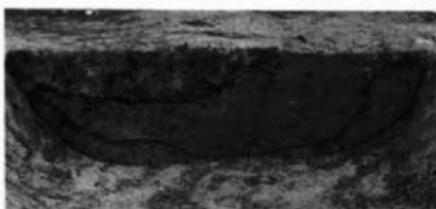


E溝断面

図版第10図



F溝（南東から）



F溝断面



G溝（東から）



G溝（西から）

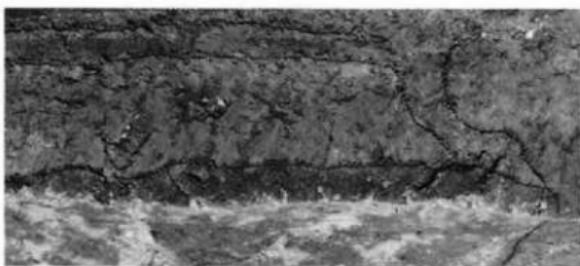
図版第11図



H溝（北東から）



H溝断面



H溝断面

図版第12図



1号土壤(北から)

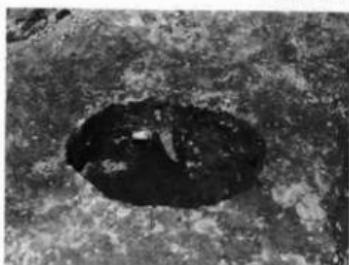


1号土壤遺物出土状況

図版第13図



16 BP<sub>13</sub> (東から)



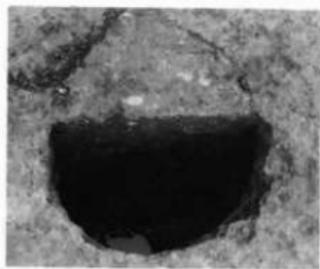
17 BP<sub>R</sub> (南から)



16 FP<sub>4</sub> (南から)



2号土壤



20 BP<sub>23</sub>



16 BP<sub>1</sub>

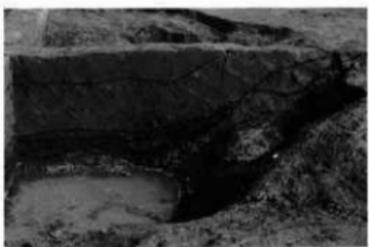
図版第14図



8GP<sub>1</sub>, 8GP<sub>2</sub> (東から)



16FP<sub>1</sub> (西から)



16FP<sub>1</sub> 断面



C溝土器出土狀況



5号土壤土器出土狀況

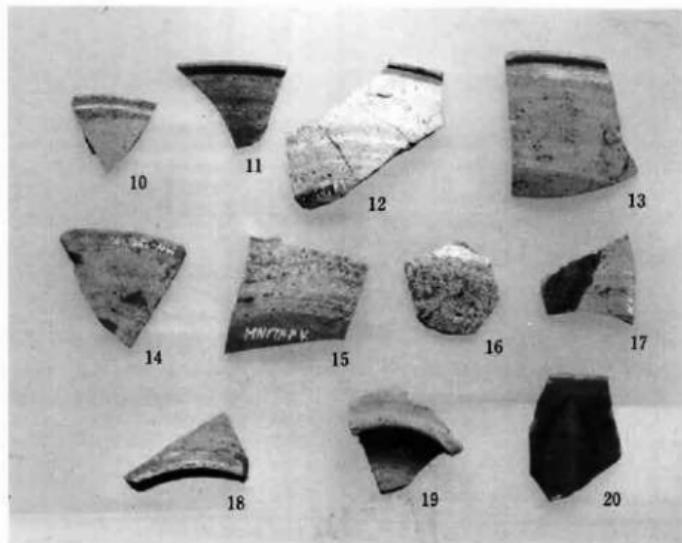


17BP<sub>3</sub>刀子出土狀況



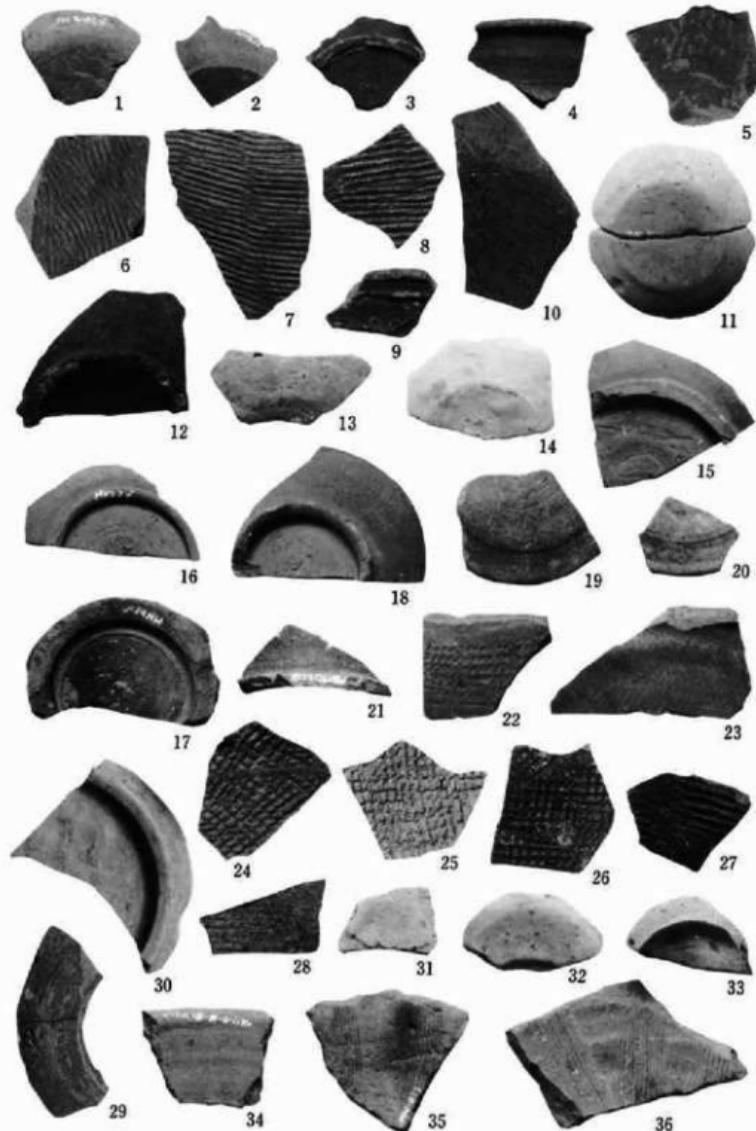
土器出土狀況

図版第16図



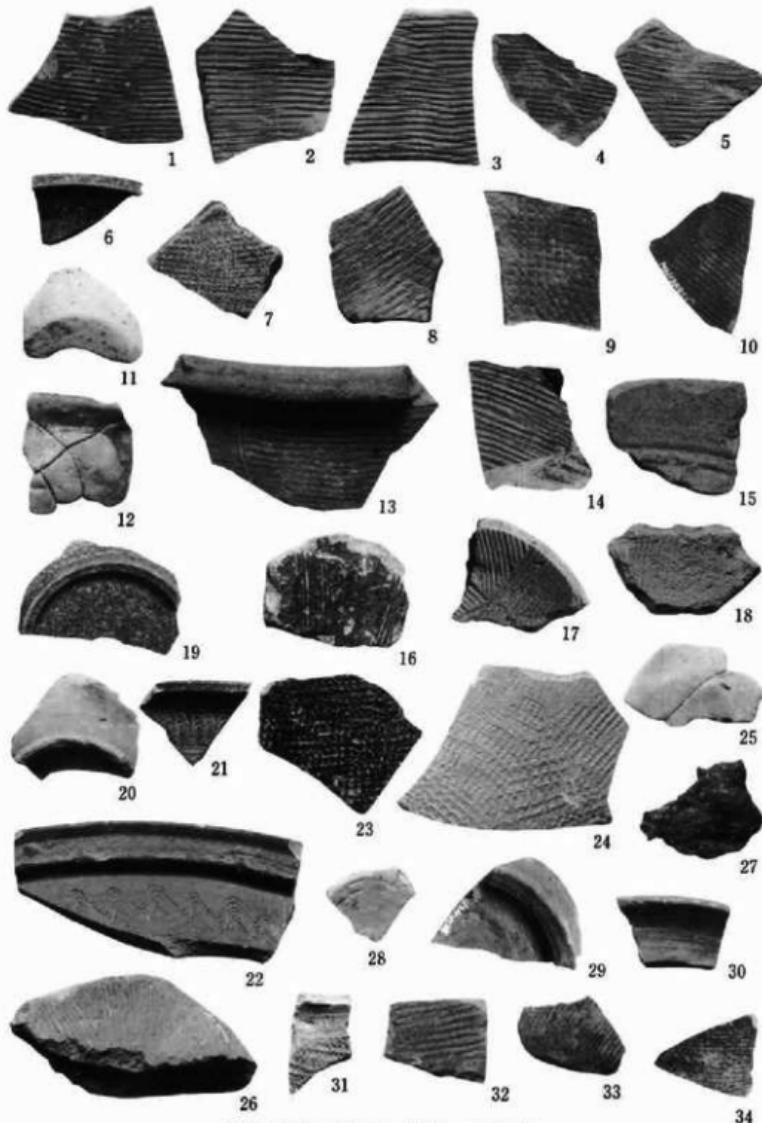
遺構内外出土遺物（須恵器・土師器・灰釉陶器他）

図版第17図



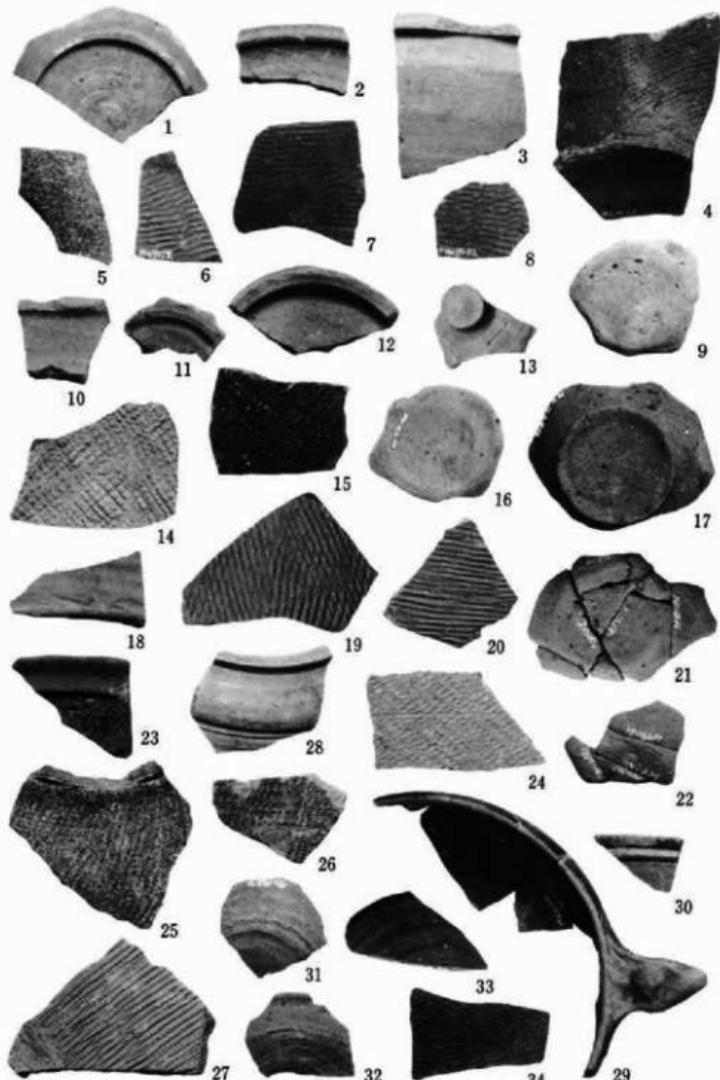
溝出土遺物（須恵器・土師器・中世陶器）

図版第18図



溝出土遺物（須恵器・土師器・中世陶器）

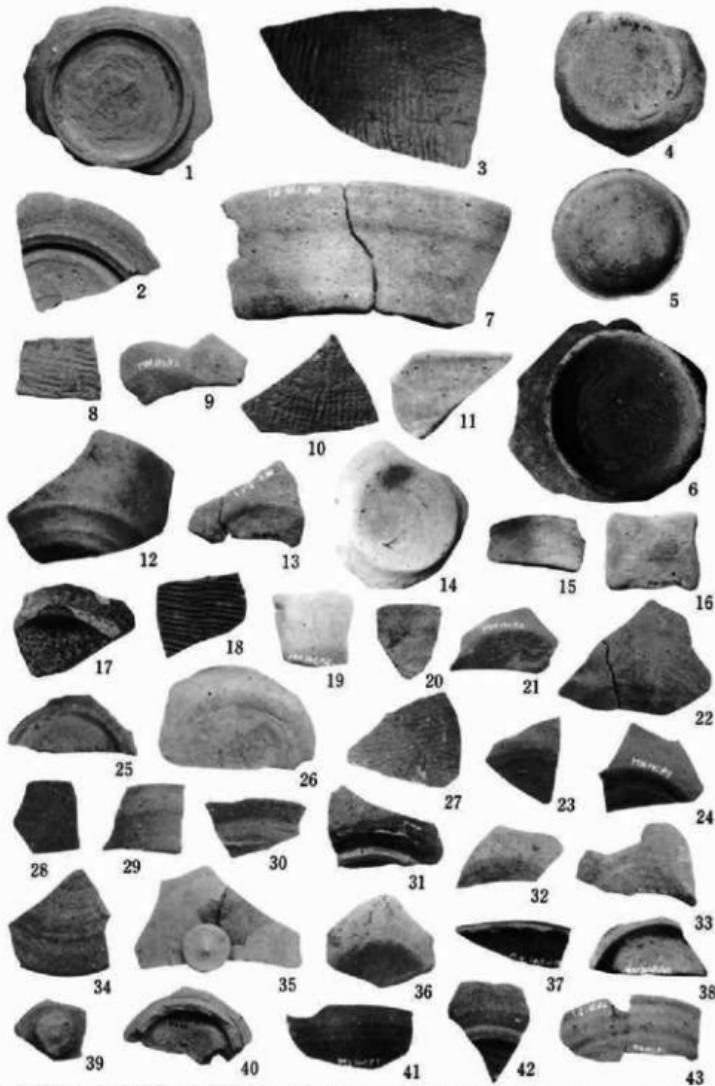
図版第19図



1~9 8G P<sub>g</sub>, 10~11 15B P<sub>g</sub>, 12~17 16B P<sub>g</sub>, 18~20 16D P<sub>g</sub>, 21~22 16E P<sub>g</sub>, 23~29 16F P<sub>g</sub>,  
30 16F P<sub>g</sub>, 31 17B P<sub>g</sub>, 32, 33 17C P<sub>g</sub>, 34 17F P<sub>g</sub>

ピット出土遺物(須恵器・土師器他)

図版第20図



1~6 17H P<sub>b</sub>, 7 17G P<sub>1</sub>, 8・9 18D P<sub>b</sub>, 10 18F P<sub>b</sub>, 11~14 18H P<sub>b</sub>, 15・16 18H P<sub>a</sub>, 17 19B P<sub>a</sub>, 18 19B P<sub>1b</sub>, 19~22 19C P<sub>a</sub>, 23 19C P<sub>b</sub>, 24 19C P<sub>7</sub>, 25~28 19D P<sub>7</sub>, 29~36 19D P<sub>b</sub>, 37 20B P<sub>13</sub>, 38~39 20B P<sub>16</sub>, 40 20B P<sub>23</sub>, 41~43 20C P<sub>1</sub>

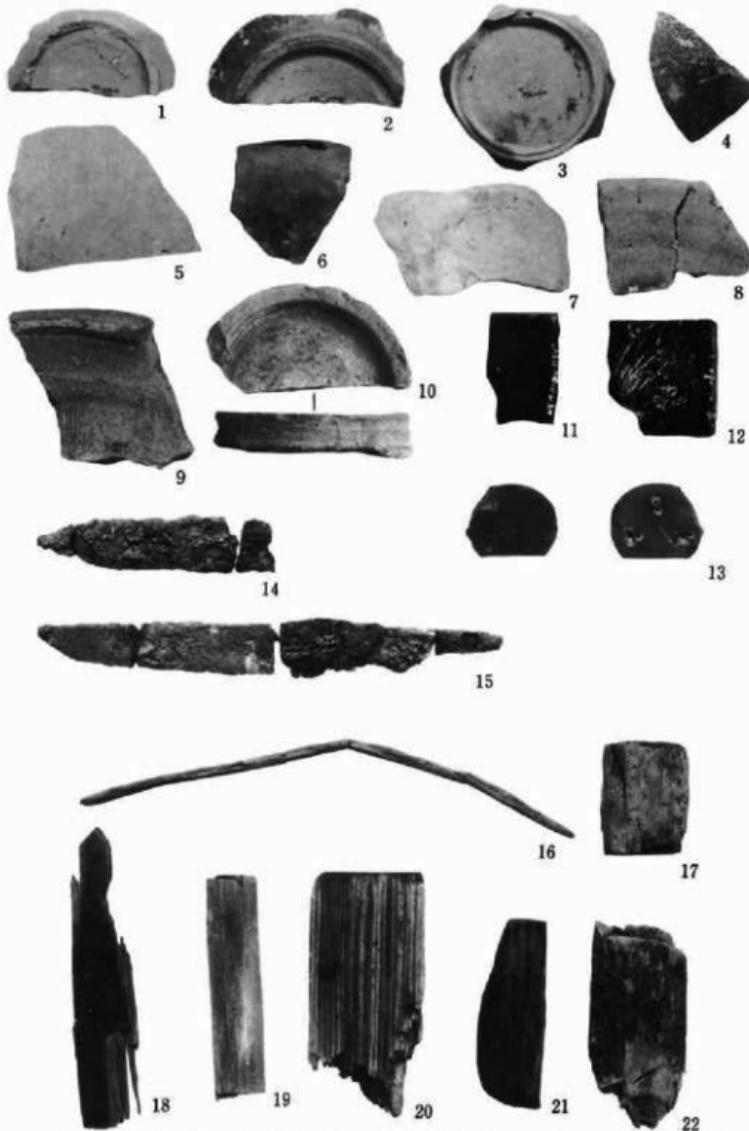
ピット出土遺物(須恵器・土師器)

図版第21図



ピット出土遺物（近世陶磁器）

図版第22図



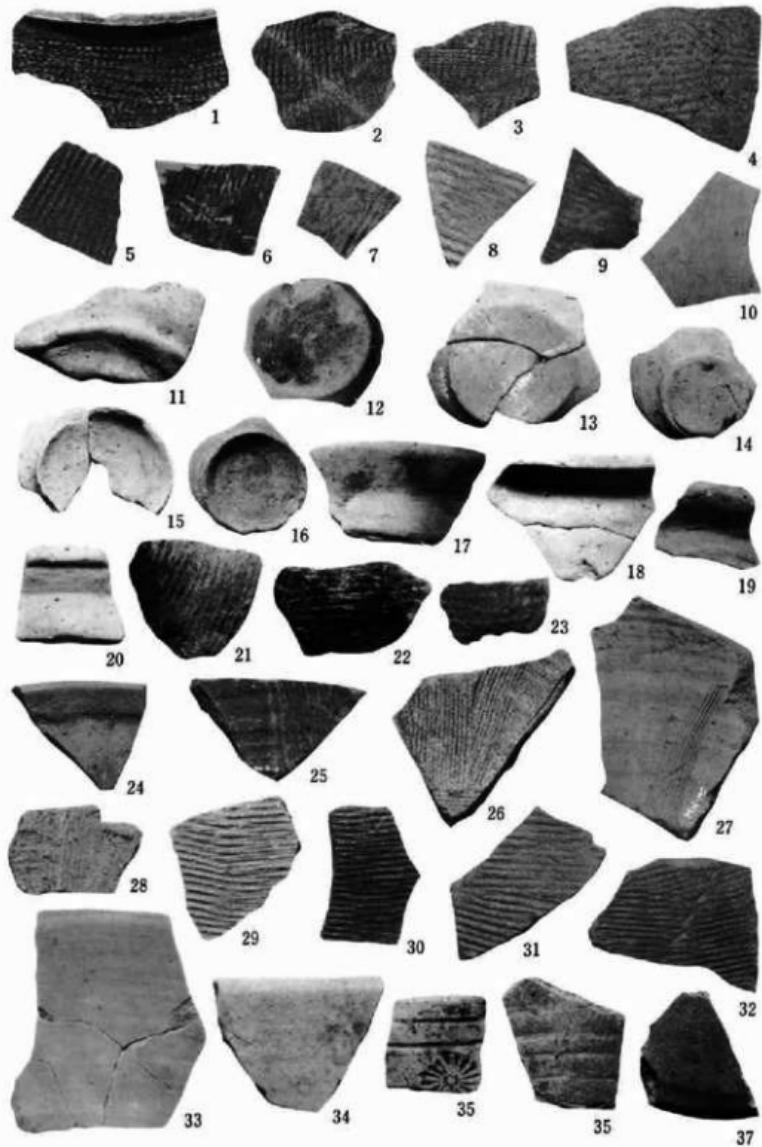
1~9 24 BP<sub>h</sub>, 10~16 DP<sub>h</sub>, 11~12 D溝, 13 2号建物跡, 14 17 BP<sub>4</sub>, 15 17 BP<sub>5</sub>, 16~22 2号土塙  
建物跡・溝・ピット出土遺物 (須恵器・土師器・名鉢・力子他)

図版第23図



遺構外出土遺物（須恵器）

図版第24図



造構外出土遺物（須恵器・土師器・中近世陶器）

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第32  
北陸自動車道

**埋蔵文化財発掘調査報告書**

**宮野遺跡**

昭和60年3月21日 印刷  
昭和60年3月31日 発行

発行 新潟県教育委員会  
印刷 長谷川印刷